

# 熊野町遺跡

—昭和63年度発掘調査報告書—

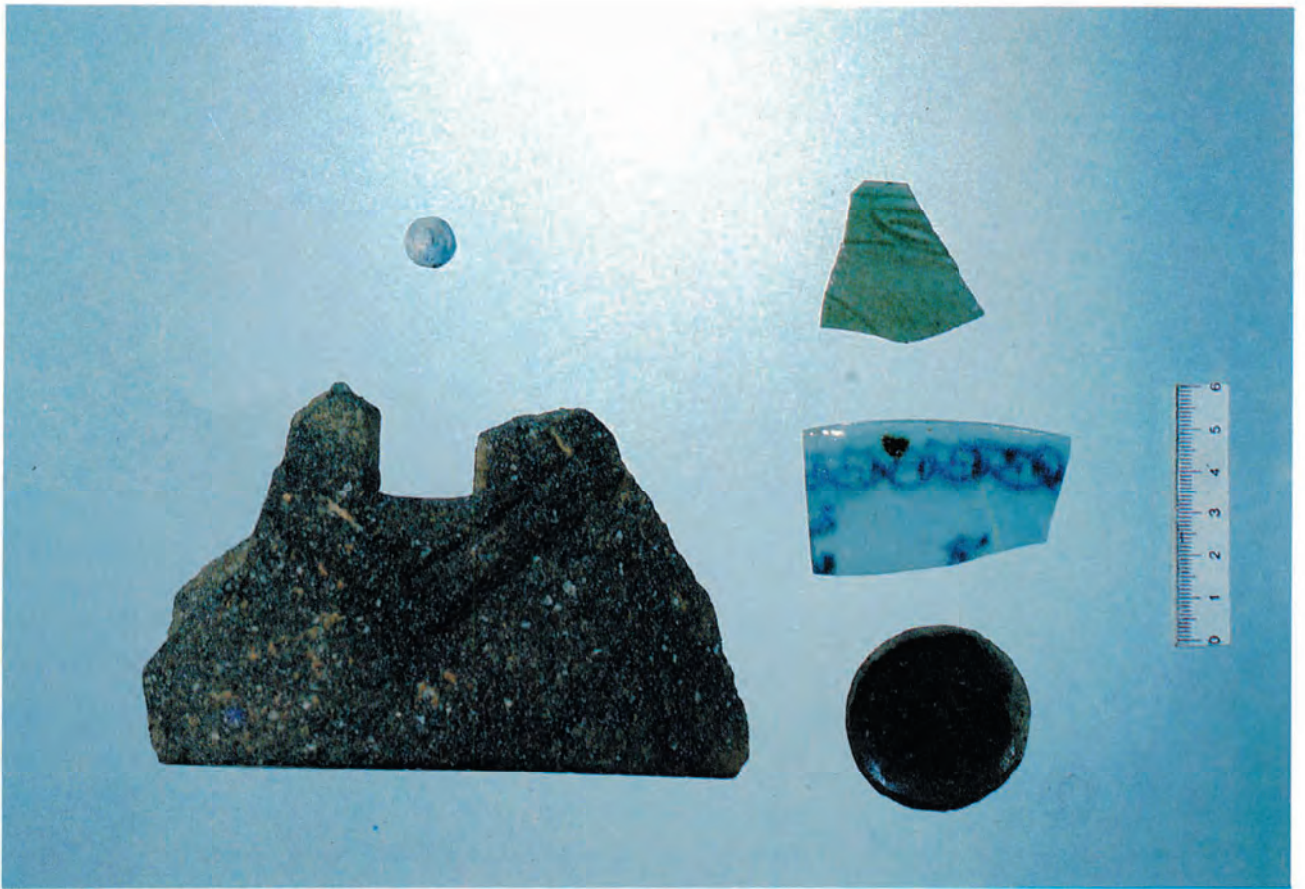


遺跡遠影（鎌ヶ崎館より望む）

1990.3

岩手県宮古市教育委員会  
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

カラー | 出土遺物



(カラー1)



## 序 文

本報告書は、宅地造成工事に先だち破壊されることとなった熊野町遺跡の緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

調査の結果、遺構、遺物の出土量は少なかったものの、宮古地方の中世史を探る上で重要な資料を得ることができました。特に堅穴住居跡などから出土した遺物には16世紀後半代の年代観が与えられ、今後、当地方における中世遺跡の編年を構築する際には貴重な標式資料になるものと思われまます。

また、中世遺跡というとはかく城館跡に目を奪われがちでしたが、熊野町遺跡の調査成果はこれに対する警鐘となったようです。今後は、城館跡とこれに付属する施設（遺跡）や一般民衆の生活した場である集落や様々な生産活動の場などへ広く目を向けた総合的な見地からの調査が必要となって来ます。

残念ながら熊野町遺跡はやがては宅地として造成されることとなります。これと引替えとするにはあまりに小さな報告書ですが、今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査の実施から報告書の作成、刊行に当り多大なる御協力を頂いた岩手県教育委員会文化課、財団法人岩手県埋蔵文化センター、早川剛司氏をはじめとする地権者の皆様および実際の作業に携わった市民の皆様などの関係者各位に対し厚く御礼を申し上げます。

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸



## 例 言

1. 本書は昭和63年度に実施した熊野町遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業および報告書刊行の主体は宮古市教育委員会（教育長 小野寺聰・保坂純三・佐藤勇逸）で、発掘調査および、本書の執筆、編集は、高橋・盛合が担当し、鎌田が補佐した。
3. 調査座標は任意とし、高さは標高値をそのまま使用した。座標軸の方向はN35° Eである。
4. 発掘調査および遺物の整理、本書の執筆に際しては次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して謝意を申し上げる。（敬称略）

相原 康二（岩手県教育委員会文化課（当時）） 小田野哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）  
高橋 信雄（岩手県教育委員会文化課） 高橋興右衛門（ ）  
佐々木 勝（ ） 原田 秀文（盛岡市教育委員会）  
昆野 靖（岩手県埋蔵文化財センター） 斉藤 英樹（宮古市文化財保護審議委員）

5. 本文中の参考、引用文献は次のとおり略記した。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

- 1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 小田野哲憲  
熊谷 常正 → 『大付報文79』  
1983～86 『宮古市遺跡分布調査報告書 1～4』 武田将男 → 『分布調査1～4』  
1986 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男 → 『分布図86』  
1985 『金浜館発掘調査報告書』 武田将男 → 『金浜館報文85』  
1987～89 『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅲ 昭和61～63年度発掘調査概報』 高橋憲太郎外  
→ 『崎山遺跡群Ⅰ～Ⅲ』  
1988 『青猿Ⅰ遺跡・下在家Ⅱ遺跡・千徳城遺跡群（堀合館）』 鎌田祐二外  
→ 『青猿Ⅰ報文88』・『下在家Ⅱ報文88』・『堀合館報文88』  
1989 『トロノ木Ⅰ遺跡 第1次～第7次発掘調査報告書』 高橋憲太郎外  
→ 『トロノ木Ⅰ報文89』

# 目 次

序 文  
例 言  
目 次

I	調査経過	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査要旨	1
3.	調査体制	1
II	遺跡をとりまく環境	2
1.	周辺の遺跡	2
2.	宮古市内の中世および近世の遺跡	5
III	調査内容	15
1.	遺構の検出状況と基本層序	15
2.	検出された遺構と遺物	15
IV	調査のまとめ	33

## 図 版 目 次

第1図版	第1号竪穴住居跡（完掘状況）
第2図版	第1号竪穴住居跡（堆積状況）
第3図版	張り出し部堆積状況、遺物出土状況（茶臼）
第4図版	遺物出土状況（茶臼、天目茶碗）
第5図版	P5・P12堆積状況
第6図版	第2号堀立柱建物跡（完掘状況、堆積状況）
第7図版	P3堆積状況・遺物出土状況（染付茶碗）
第8図版	第3号遺構・第14号土壇跡（完掘状況）
第9図版	第1号土壇跡・第3号土壇跡（堆積状況）
第10図版	第11号土壇跡（遺物出土状況）・第15号土壇跡（完掘状況）
カラー図版（カラー1）	出土遺物
内表紙	遺跡遠影（鎌ヶ崎館より望む）

## 挿 図 目 次

第1図	宮古市内の中世・近世遺跡……………	3. 4
第2図	熊野町遺跡と周辺の遺跡……………	6
第3図	地形分類図……………	8
第4図	熊野町遺跡周辺地形図……………	9. 10
第5図	遺構配置図……………	11. 12
第6図	A区土層断面図（1）……………	14
第7図	A区土層断面図（2）……………	15
第8図	第1号竪穴住居跡、第3・4・5・6・20号壇跡（1）……………	17
第9図	第1号竪穴住居跡、第3・4・5・6・20号壇跡（2）……………	18
第10図	出土遺物……………	19
第11図	第2号堀立柱建物跡……………	21
第12図	第2号堀立柱建物跡土層断面図……………	22
第13図	第3号遺構、第13・14号土壇跡……………	23
第14図	第3号遺構、第13・14号土壇跡土層断面図……………	24
第15図	第1・2号土壇跡……………	25
第16図	第7・8・9号土壇跡……………	27
第17図	第10、11、12号土壇跡……………	29
第18図	第15・16・17・18・19号土壇跡……………	31
第19図	土壇跡土層断面図……………	32

## 付 表 目 次

表1	熊野町遺跡周辺の遺跡台帳……………	7
----	-------------------	---



## I 調査経過

### 1. 調査に至る経過

熊野町遺跡は宮古市熊野町地内に所在する。当遺跡の立地する丘陵上に土器片等の散布があり、遺跡として登録されている。宮古市遺跡コードはL G 21-2142である。

昭和62年3月、早川剛司より当地区を開発したいという届出および発掘調査の願出書が提出された。これを受けて宮古市教育委員会は、早川と協議を重ねたところ記録保存を前提とし緊急調査を実施することで同意が得られた。しかし、開発行為の事前審査による設計変更が続いたことや、一部地権者の同意が遅れたことなどの理由により、実際に調査に着手したのは昭和63年8月3日となり、同年10月14日にて発掘調査を終了した。また、室内整理作業については昭和63年12月より平成元年3月まで実施し、報告書の印刷製本を平成元年度に実施した。

### 2. 調査要旨

調査地点 宮古市熊野町24-1, 24-9, 60, 75-5, 77-22, 82-1

調査原因 宅地造成（開発行為）

調査期間 昭和63年8月3日～昭和63年10月14日

調査対象面積 26,000㎡ 調査面積 4,000㎡

検出遺構 中世に伴う竪穴住居、堀立柱建物跡や所属時期不明の土壇跡など

出土遺物 陶磁器類（破片）、茶臼、鉄砲玉など

### 3. 調査体制

発掘調査および室内整理作業の体制は次のとおりである。

調査主体 小野寺 聡 宮古市教育委員会教育長（昭和63年12月まで）

＊ 保坂 純三 ＊ （平成元年9月まで）

＊ 佐藤 勇逸 ＊ （平成元年10月より）

調査総括 吉田 昌義 宮古市教育委員会社会教育課長（平成元年3月まで）

＊ 拱待 保典 ＊ （平成元年4月より）

調査事務 小本 哲 宮古市教育委員会社会教育係長

＊ 佐藤 広昭 宮古市教育委員会社会教育係主事

調査員 高橋憲太郎・鎌田祐二・盛合義信 宮古市教育委員会社会教育係主事

調査の実施にあたり、次の各位から多大の協力をいただいた。（敬称略）

〈地権者〉 早川剛司、巖田勝三、川上啓蔵、本田喜一郎、岩手県企業局

〈発掘調査、室内整理〉 佐々木茂、北村忠治、田崎昭吾、佐々木清、森田隆、今津東一

菊池青八、神林信吉、大越貞蔵、山内専太郎、水本正男、吉田稔、菅原テルミ、藤谷晶子

松館喜八、竹田末人、佐伯裕則、阿部豊、吉田昭、小島貞一、伊藤晴男

## II 遺跡をとりまく環境

### 1. 周辺の遺跡

#### 閉伊川下流部

三陸沿岸地方では折指の河川である閉伊川は北上山地内をぬうように東流し、多くの支流からの水を集め、宮古湾の西岸にそそいでいる。概して閉伊川による河岸段丘の発達が悪く、面的な連続性はない。しかし、河口部付近では長沢川、近内川、山口川などの河川が合流することもあり、比較的広範囲に氾濫平野（閉伊川底地）を発達させており、現在の市街地をのせている。長沢川合流点以東の閉伊川底地はほぼ標高4.0m～5.0mほどである。

閉伊川河口付近の両岸は花崗岩などを基盤岩とする小起伏山地があり、北岸のものを黒森山山地、南岸のものを花輪山山地と呼ぶ。両者とも閉伊川に面する部分には斜度の緩い丘陵を有すが、黒森山山地前面のもの（板屋～千徳～近内～長根～泉町～山口～小沢～本町～愛宕～嶽ヶ崎）を千徳丘陵と呼び、花輪山山地前面のもの（小山田～藤原～磯鷲～八木沢）を八木沢丘陵と呼ぶ。また、花輪山山地前面のものうち、長沢川合流部付近のもの（田鎖～花輪、松山）は千徳丘陵に一括されている。これらの丘陵の閉伊川底地からの比高はほぼ40m～80mほどとなっている。

閉伊川流域の遺跡は大半がこの丘陵上に立地しており、縄文時代～古代～中世にわたっている。縄文時代の遺跡は嶽ヶ崎館山貝塚や蝦夷森貝塚などのように丘陵頂部に存在するものもあるが、小沢貝塚や上村貝塚などのように丘陵に連続する緩斜面上に存在するものの方が多いように思われる。特に小沢貝塚や大上遺跡は標高10m程度の緩斜面上に立置している。しかし、閉伊川底地上に立地するものはない。古代の遺跡は奈良時代と平安時代を中心としたものであるが、この時期の集落は丘陵頂部に営まれるものが多い。特に近内～長根～泉町にかけては宅地造成などの時前調査の件数が多く、泉町狐崎遺跡からは奈良時代後半期の竪穴住居跡が4棟検出され、これと隣接する泉町狐崎Ⅱ遺跡でも奈良時代後半期から平安時代にかけての竪穴住居跡が検出されているし、これらの中には鉄製農具などを伴う例もある。

また、青猿Ⅱ遺跡からは奈良時代～平安時代の竪穴状遺構が検出され、青猿Ⅰ遺跡からは平安時代の竪穴住居跡2棟および鉄製関連遺構（炬および鉄滓拾場）などが検出されている。

#### 長根古墳群

更に、昭和63年度に調査された長根Ⅰ遺跡からは、古墳時代末～奈良時代を中心とする群集墳が検出され、わらびて刀や直刀などの刀類、玉類、和同開珎などの副葬品も確認され特筆される。

続く中世では丘陵上に位置する城館跡等が上げられるがこれについては後述する。

以上、閉伊川下流部の遺跡群は丘陵の頂部を中心に展開していることがわかる。しかし、閉伊川底地はだいぶ遅くまで湿地化したままであったために、ここへの進出はかなり遅れ近世以降になってやっと宅地化が進んで来るようである。ただし、千徳丘陵上の古代集落には鉄製農具を伴うものもあるので、古代以降閉伊川低地の一部などを田や畑などの耕地として活用していた可能性は否定できない。

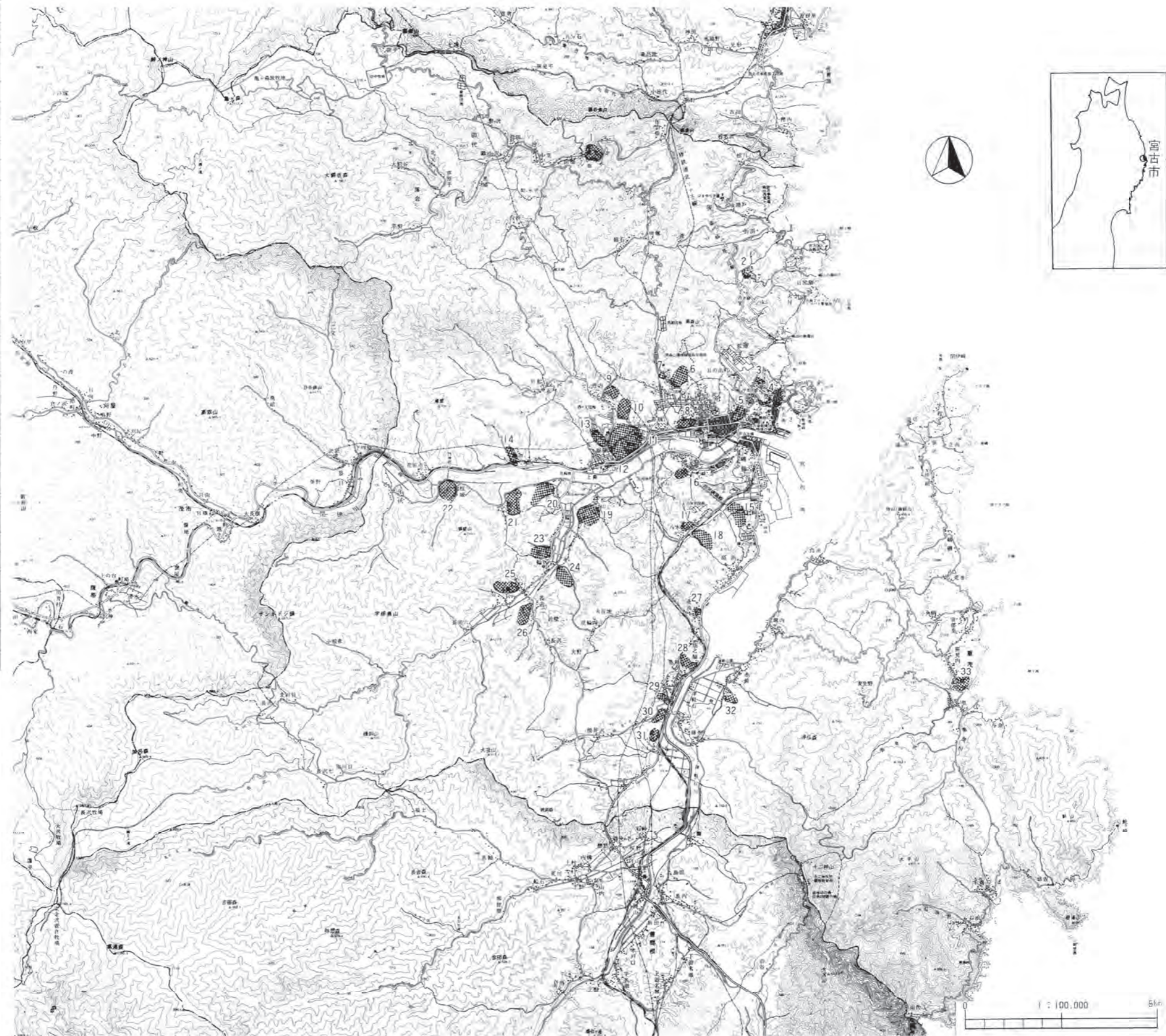
#### 小本丘陵

閉伊川河口部以北の海岸線に沿ってみられる丘陵は小本丘陵と呼ばれ、西側の黒森山山地に連続している。小本丘陵は洪積世の海岸段丘によるものであり、海岸部での標高約90m、黒森



No	遺跡名	時代
1	田代館	南北朝時代頃か
2	トロノ木I遺跡	近世
3	熊野町遺跡	中世末
4	獄ヶ崎館	室町時代末
5	黒田館	室町時代末
6	山口館	不詳
7	赤畑I遺跡	中世～近世
8	笠間館	南北朝時代初期(14世紀前半)
9	近内館	室町時代から戦国初期
10	近内大館	不詳
11	千徳城	14世紀末
12	堀合館	不詳
13	千徳遺跡	中世?
14	根市館	鎌倉時代末期(14世紀初頭)
15	磯鷄館山	不詳
16	小山田館	不詳
17	八木沢新館	不詳
18	八木沢古館	不詳
19	松山館	南北朝時代末(14世紀後半)
20	田鎖城	永和年間(1370年代)
21	老木館	室町時代初期
22	根城館跡	南北朝時代初期(14世紀末)
23	花輪館	天文15年(1546)
24	鱒沢館	不詳
25	長沢館	室町時代後期から戦国初期
26	折壁館	室町時代
27	金浜館	戦国時代
28	山崎館	不詳
29	沼里館	室町時代中頃
30	高平館	不詳
31	払川館	室町時代から戦国初頭
32	赤前館	南北朝時代
33	重茂館	15世紀末か

(註) 時代については田村(1983)を参考にした。



第1図 宮古市内の中世・近世遺跡







山山地との境界付近での標高約150mを計る。この地区に立置する遺跡は大半が縄文時代のもので、なかでも縄文前期から縄文中期の遺跡が多い。

また、古代の遺跡は鎌ヶ崎、日影町、佐原、早稲橋地区と田代地区の一部にわずかにみられる程度で、閉伊川下流域の古代遺跡が活況を呈するのと好対照をなす。

鎌ヶ崎館山貝塚は小本丘陵の南端部に相当する鎌ヶ崎地区の中心的な遺跡であり、縄文時代の集落および貝塚、古代の集落と中世の城館跡（鎌ヶ崎館）が複合する遺跡である。古来、地元の研究者のみならず中央の学者が多く来跡し調査活動を続けて来ており、縄文時代の貝塚に関する資料は少なからず蓄積されて来たようであるが、大半は未公開のままとなっている。平成元年度に実施した緊急調査では縄文時代の遺構の他に平安時代の竪穴住居跡を検出したが、埋土中にイガイ等を主体とする貝層が形成され、製塩土器が出土したのもあり特筆される。

鎌ヶ崎館山貝塚

鎌ヶ崎館については室町時代末頃に河北閉伊氏により築かれたとされているが詳細は全く不明である。

鎌ヶ崎館

熊野町遺跡は鎌ヶ崎館山貝塚（鎌ヶ崎館）の北北西約500mにあり、沢により深く切り込まれ樹枝状を呈している小本丘陵の端部に立置している。頂部での標高は約100mを計る。

熊野町遺跡

宮古市の北部に位置する崎山遺跡群も小本丘陵上に立置しているが、崎山貝塚、大付遺跡（貝塚）、白石遺跡などの著名な遺跡が多く分布している。

閉伊川河口部の南約1.5kmには南南西から八木沢川が宮古湾に注いでいる。八木沢川は小河川ではあるが、流域に縄文時代から中世にかけての遺跡が多く分布している。これらの多くは八木沢丘陵や花輪山山地が開析されて生じた尾根の頂部あるいは緩斜面上などに立置している。

八木沢川流域

これらの中で特筆されるのが、河口部北岸の磯鶏地区に集中する貝塚群である。また、古代の集落については、閉伊川流域同様に活況を呈し、製鉄関係の遺構を伴うものや貝層を伴うものなども確認されている。

最後に宮古湾の湾頭部には北流する津軽石川が注ぎ、比較的規模の大きい津軽石川底地が形成されている。標高およそは2m～10mを計る。遺跡は西岸の津軽石、沼里、弘川および支流の根井沢地区や荷竹方面に、また、東岸では藤畑、赤前、堀内に多く分布している。これらは縄文時代から中世にかけての遺跡であるが、縄文時代～古代の遺跡は河岸段丘上や扇状地などの緩傾斜地に立置するものが多く、標高も50m以下のものがほとんどであり、なかには標高10m程度のところに立置しているものもある。

## 2. 宮古市内の中世および近世の遺跡

現在宮古市内で確認されている中世および近世の遺跡は30ヶ所を数えるが、大半は中世の城館遺跡である。

中世城館跡の分布状況を見るとまず目につくのが閉伊川下流域である。北岸部では西から「根市館」、「掘合館」、「千徳城」、「千徳古城」、と続き、支流の近内川流域には「近内館」と「近内大館（蝦夷館）」が存在する。同じく支流の山口川流域には「山口館」の外、中世～近世の竪穴を検出した赤畑Ⅰ遺跡や中世の山茶碗が出土したとされる馬子舞遺跡などが存在する。更に、閉伊川の河口部付近に「笠間館」、「黒田館」、「鎌ヶ崎館」および熊野町遺跡がある。

閉伊川以北には田代川流域の「田代館」や近世の掘立柱建物跡と井戸跡を検出したトロノ木





第2図 熊野町遺跡と周辺の遺跡



〈表1〉熊野町遺跡周辺の遺跡台帳

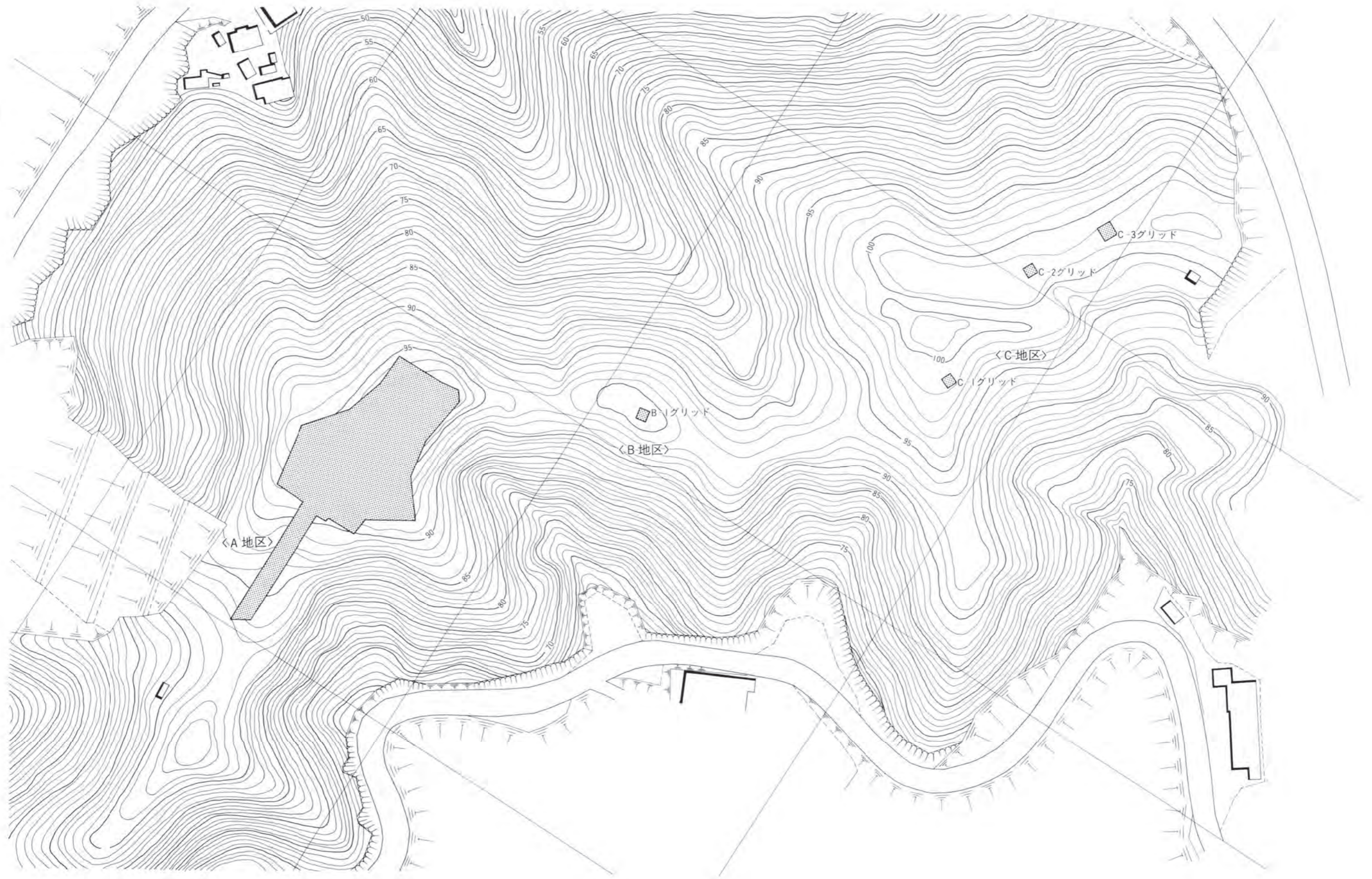
No.	遺跡コード	遺跡名	時代	No.	遺跡コード	遺跡名	時代
1	LG23-1332	黒森山遺跡		35	LG33-0322	鴨崎Ⅱ遺跡	古代
2	LG23-1326	黒森遺跡		36	LG33-0340	笠間館遺跡	中世
3	LG24-1020	早稲栃Ⅳ遺跡		37	LG33-0385	横山遺跡	古代
4	LG23-1364	黒森マギ沢遺跡	縄文早期	38	LG34-1007	藤原上町Ⅰ遺跡	縄文前期・古代
5	LG24-1069	佐原遺跡	縄文	39	LG34-1027	藤原上町Ⅱ遺跡	奈良末～平安初頭
6	LG24-1166	平松Ⅰ遺跡	縄文前期・中期	40	LG34-1045	藤原上町Ⅲ遺跡	縄文・古代
7	LG24-1184	平松Ⅱ遺跡	縄文前期・中期	41	LG34-1047	磯鶏石崎遺跡	縄文・古代
8	LG24-1187	平松Ⅲ遺跡	縄文中期	42	LG34-1075	早坂遺跡	縄文早期・弥生・古代
9	LG23-2310	山口館遺跡	中世	43	LG34-1073	小山田遺跡	縄文中期・古代
10	LG23-2323	拝殿峠遺跡	縄文後期	44	LG34-1085	上村貝塚遺跡	縄文中期
11	LG23-2325	小沢Ⅴ神龍石遺跡	縄文晩期・古代	45	LG34-1084	上村Ⅱ遺跡	縄文中期・古代
12	LG23-2336	小沢Ⅳ人形鼻遺跡	縄文後期・古代	46	LG34-2007	磯鶏蝦夷森貝塚遺跡	縄文中期・古代
13	LG23-2346	小沢Ⅲ石倉平遺跡	縄文中期・後期	47	LG34-2013	磯鶏竹洞Ⅰ遺跡	縄文中期・古代
14	LG24-2003	日の出町Ⅰ遺跡	縄文前期	48	LG34-2001	上村Ⅳ遺跡	縄文中期・古代
15	LG24-2033	日の出町Ⅱ遺跡	縄文中期	49	LG34-1091	上村Ⅲ遺跡	縄文中期・古代
16	LG24-2044	日の出町Ⅲ遺跡	縄文	50	LG33-2306	小山田Ⅱ遺跡	古代
17	LG24-2076	沢田Ⅰ遺跡	古代	51	LG33-1370	小山田館遺跡	中世
18	LG24-2132	熊野町遺跡	中世	52	LG33-1380	小山田Ⅰ遺跡	古代
19	LG24-2158	井戸ヶ洞遺跡	縄文	53	LG33-2351	八木沢守ノ越Ⅳ遺跡	縄文・古代
20	LG23-2353	拝殿ヶ沢遺跡	縄文・古代	54	LG33-2343	猿楽峠遺跡	古代
21	LG23-2377	小沢貝塚遺跡	縄文早期	55	LG33-2372	八木沢守ノ越Ⅲ遺跡	縄文・古代
22	LG24-2080	小沢Ⅱ大上遺跡	縄文	56	LG33-2349	磯鶏竹洞Ⅱ遺跡	縄文・古代
23	LG24-2087	沢田Ⅱ遺跡		57	LG34-2123	磯鶏沖遺跡	中世
24	LG24-2150	日影町Ⅰ遺跡	縄文晩期	58	LG34-2155	磯鶏館山遺跡	中世・平安
25	LG24-2175	日影町Ⅱ遺跡		59	LG34-2076	仏沢Ⅰ遺跡	古代
26	LG24-2183	鎌ヶ崎館山貝塚遺跡	縄文・前・中・後期	60	LG34-2097	仏沢Ⅱ遺跡	縄文・古代
27	LG24-2190	小山根遺跡	縄文・弥生・古代	61	LG44-0003	磯鶏中谷地遺跡	古代
28	LG34-0025	黒田館遺跡	中世	62	LG34-2091	鳥田遺跡	平安
29	LG34-0122	夏保遺跡	縄文	63	LG43-0312	八木沢新館遺跡	中世
30	LG34-0103	鎌ヶ崎仲町遺跡	縄文	64	LG43-0301	八木沢守ノ越Ⅰ遺跡	縄文
31	LG34-0124	鎌ヶ崎上町遺跡	縄文	65	LG43-0330	八木沢Ⅰ白山下遺跡	縄文中期
32	LG34-0143	光岸地遺跡	縄文晩期	66	LG43-0357	八木沢古館遺跡	中世
33	LG33-0310	泉町狐崎Ⅰ遺跡	古代	67	LG44-0095	高浜Ⅰ坂ノ下遺跡	縄文
34	LG33-0311	鴨崎Ⅱ遺跡	古代	68	LG44-1013	高浜Ⅱ今ヶ洞遺跡	縄文前期・中期・後期





第3図 地形分類図

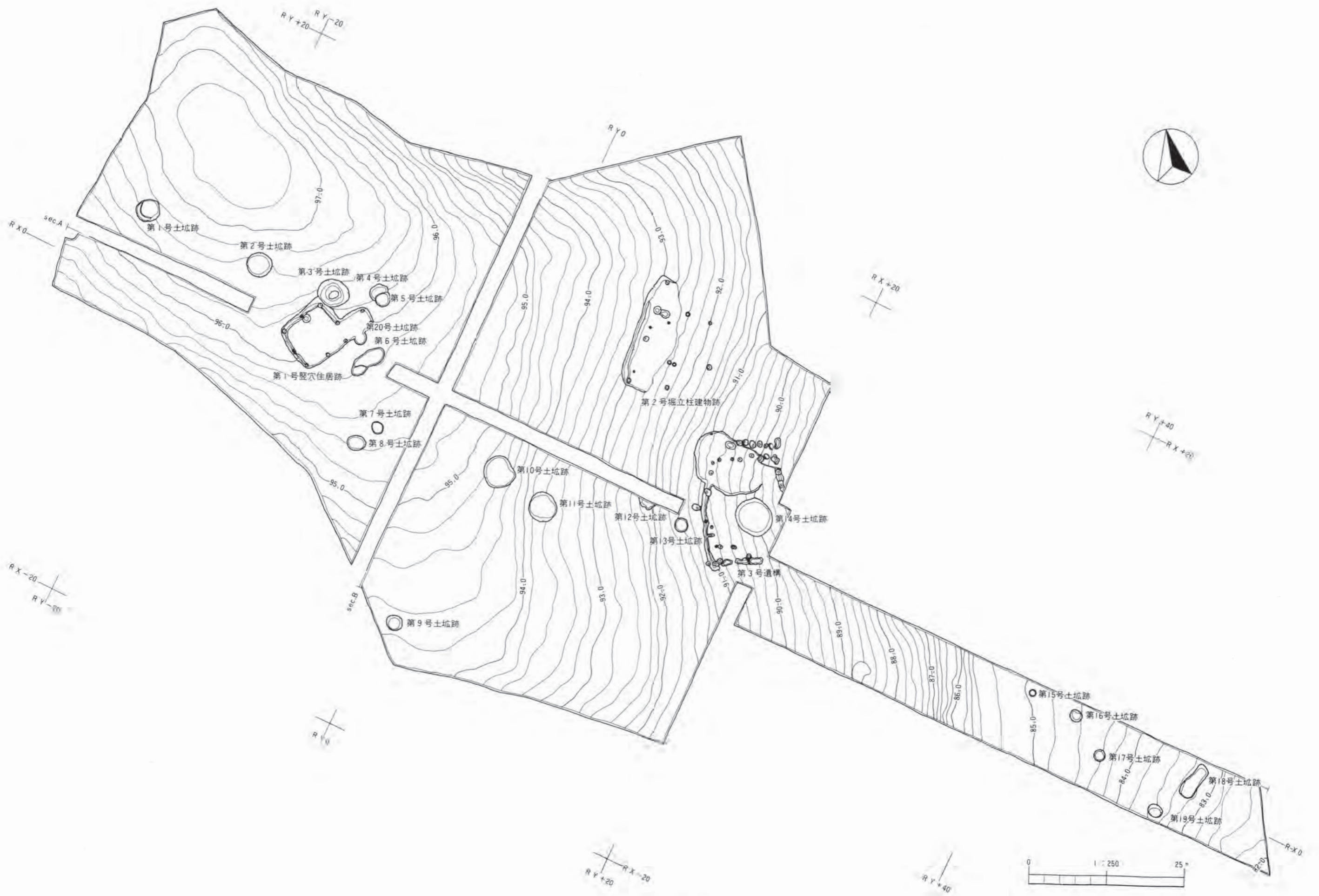




第4図 熊野町遺跡周辺地形図







第5図 遺構配置図





I 遺跡などがわずかに存在する。崎山地区にあると伝えられる「崎山館」については遺構が見当たらずに詳細は不明である。

次に閉伊川の南岸部では西から「根城館」、「老木館」、「田鎮城」があり、支流の長沢川流域には「松山館」「花輪館」、「鱒沢館」、「長沢館」、「折壁館」が存在する。更に閉伊川河口部付近に「小山田館」が存在している。

閉伊川流域以南では、八木沢川流域に「八木沢古館」、「八木沢新館」、「磯鶏館山遺跡」があり、金浜地区の「金浜館」がある。

津軽石川流域には東岸に「山崎館」、「沼里館」、「高平館」、「弘川館」、西岸に「赤前館」が存在する。また、重茂半島には「重茂館」が存在する。

これらの遺跡のうち、特に城館遺跡については、丘陵が開析されて生じた尾根の突端部に立置し、河川や街道などに面しているものが多く、いずれも周囲を眺望できる場所が選ばれる様である。

最後に、過去の調査例から概要の判明した城館跡を紹介する。

○「金浜館」 老人福祉センター建設に伴い昭和55年度にほぼ全域の発掘調査を実施した。館の最上部（主郭）から2棟の掘立柱建物跡を検出したほか、焼成を受けた天目茶碗（美濃産）2点などを埋納した土壇跡を検出している。

更に下段の帯郭からは2～3条の空堀りと整地跡（土塁？）などが検出している。

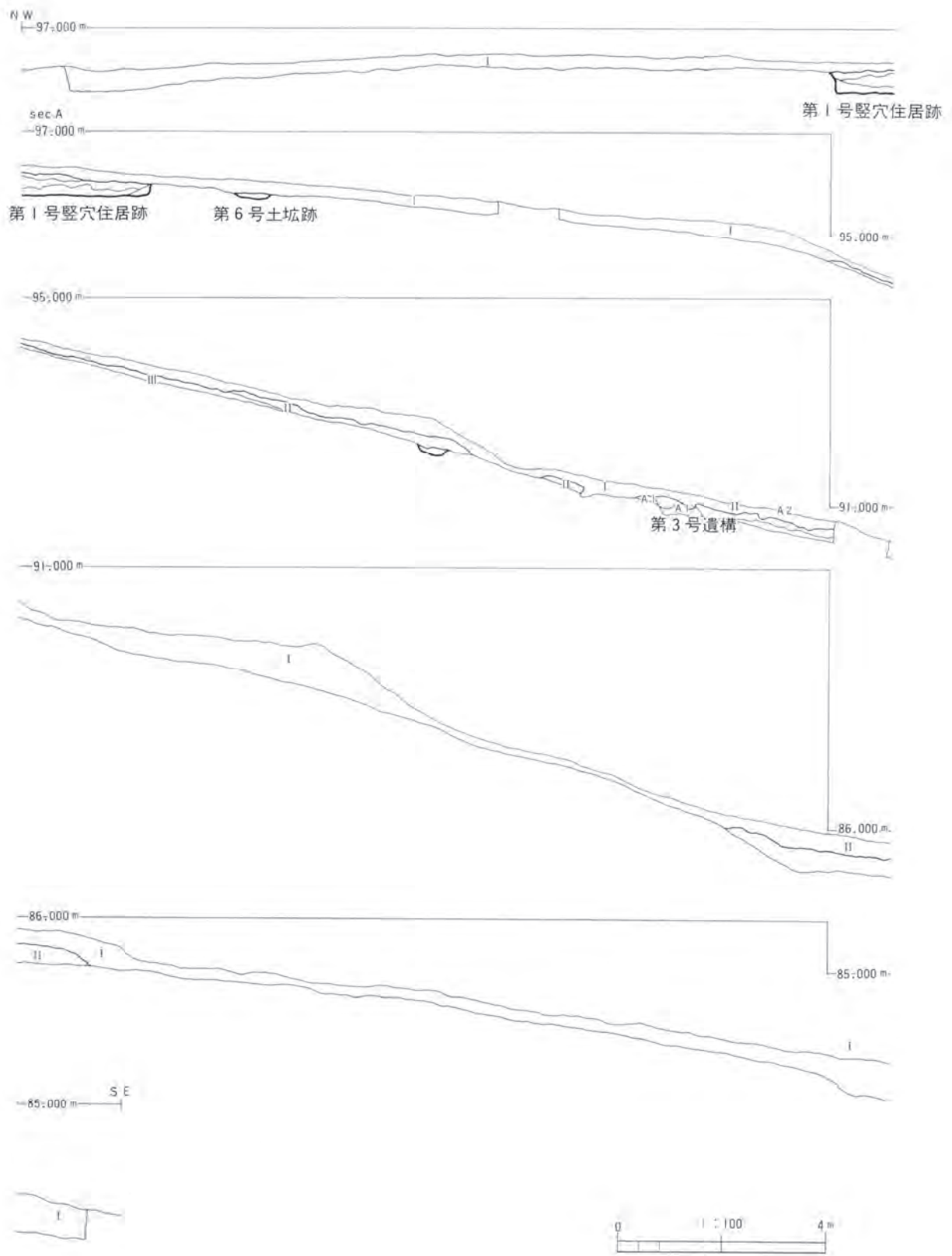
館に伴う遺物としては前述した天目茶碗のほか青磁輪花皿や鉄器類（刀、鏃、くさび）、木器などがある。陶磁器の年代は、天目茶碗が15世紀後半以降、青磁輪花皿が15世紀～16世紀とされている。従って、館の所属年代も15世紀後半～16世紀代に求められるようである（「金浜館報文85」）

○「磯鶏館山遺跡」 港湾埋立て用の土砂採取に伴い昭和59年度～61年度にかけてほぼ全域の発掘調査を実施した。館の最上部には3ヶ所の小規模な平場があり、それぞれ1、2棟の掘立柱建物跡や土壇跡などが伴う。これの下段には帯郭があり、1条の空堀りと土橋を検出している。更に、最下段には断続的ではあるが段状の遺構がめぐる。

館に伴う遺物は土壇や空堀りから出土した古銭（唐銭、北宋銭、南宋銭）、よろいの小札などが上げられる。また、直接遺構には伴わないものの青磁片や甕の破片などの陶磁器類も出土している。（未報告）

○「堀合館（千徳城遺跡群）」 墓地造成に伴い昭和62年度に部分的な発掘調査を実施した。調査区内からは2基の段状遺構と1基の土壇跡を検出している。段状遺構の構築土中からウシとウマの遺存骨を検出したのみで遺物の出土は無い。（「堀合館報文88」）

○「千徳城（千徳城遺跡群）」 宅地造成工事に伴い昭和62年度に部分的な発掘調査を実施した。尾根をとりまく道路状の段状遺構1条を検出したほか大規模な縦掘りを検出している。伴出遺物は無い。（平成2年度報告予定）



第6图 A区土层断面图(I)

### Ⅲ 調査内容

#### 1. 遺構の検出状況と基本層序

発掘調査区は、尾根の先端部付近の平坦部をA地区とし、これに続く尾根の稜線上をB地区、C地区とした。B地区、C地区は非常に狭い尾根でありグリット内から縄文土器の細片がわずかに出土したのみで、遺構は検出されなかったため、A地区を中心に調査することとした。

A地区の基本層序はI層が褐色土～やや明るい暗褐色土を基本土とするしまりのない層で耕作土である。II層は褐色土塊を含む暗褐色土層でやはりしまりが無い。旧表土である。III層は暗褐色土塊を少量含む褐色土層で漸移層である。IV層は褐色の粘土質層で地山となる。遺構はすべてIV層上面で検出した。

検出した遺構は、中世に伴う竪穴住居跡1棟、同じく中世に伴う掘立柱建物跡1棟、時期、性格不明の遺構1基および時期不明の土壇跡20基である。

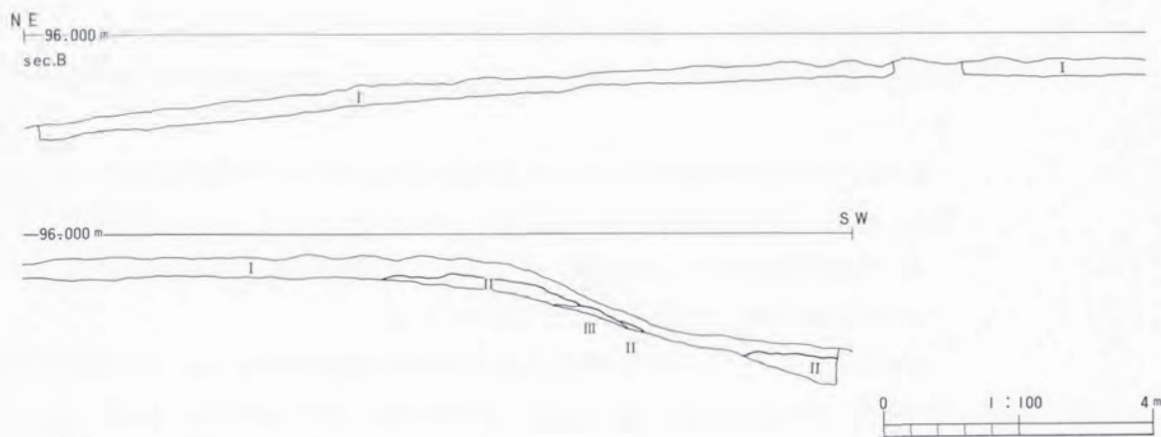
遺構の分布状況は尾根の頂部付近に第1号竪穴住居跡と第1号～第11号、第20号土壇跡があり、これらよりやや下位の比較的急傾斜面上に第2号掘立柱建物跡と第3号遺構および第12号～第14号土壇跡がある。更にこれとやや離れた調査区東端部の緩傾斜面（トレンチ部）に第15号～第19号土壇跡がある。

#### 2. 検出された遺構と遺物

第1号竪穴住居跡（第8図、第9図）

A区北西部に位置し、第3号土壇跡、第20号土壇跡に切られる。

平面形は大略隅丸方形を呈する本体部とやや不整な方形を呈する張り出し部からなる鍵形を呈する。規模は本体部が東西3.7m、南北3.6m、張り出し部が東西1.85m、南北1.6mを計る。検出面からの深さは本体部の北壁で0.55m、南壁で0.22m、張り出し部の東壁で0.1mを計る。主軸方向は張り出し部の方向でとるとE25° Nとなる。



第7図 A区土層断面図(2)



埋土は上層より、やや明るい暗褐色土～やや明るい褐色土を基本土とするA層と褐色土を基本土とするB層および周溝埋土のしまりのない明褐色土を基本土とするC層に大別される。A層はB層堆積後の凹地にレンズ状に堆積するもので7層に細分される。A<sub>1</sub>層はやや暗い褐色土を基本土とし褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。A<sub>2</sub>層も同様であるがA<sub>1</sub>層よりも暗い。A<sub>3</sub>層はやや暗い褐色土を基本土とする地山ブロック層である。B層は壁の崩壊土あるいは周辺から流れ込んだ褐色土などで、壁の周辺にのみ堆積する。3層に細分される。B<sub>1</sub>層は褐色土を基本土とし、明褐色土塊などをやや多く含む。B<sub>2</sub>層も褐色土を基本土とするもののやや明るい褐色土塊や暗褐色土塊などを多く含む、B<sub>1</sub>層よりもやや暗くなる。B<sub>3</sub>層はやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。C層は明褐色土を基本土とし褐色土塊を少量含む。

床面は平坦で固くしまっているが貼床は認められない。また、わずかではあるが、張り出し部の床面は西から東へ高くなっている。

本体部床面の南東部に地床炉が2基ある。いずれも炉床（F<sub>1</sub>層）は良く焼けているが特に炉Aは浸透層（F<sub>2</sub>層）を形成していた。

柱穴はいずれも壁直下あるいは同溝上にP<sub>1</sub>～P<sub>13</sub>、P<sub>15</sub>の14口を検出した。このうち主柱穴に相当するものが、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>10</sub>、P<sub>11</sub>、P<sub>12</sub>、P<sub>13</sub>である。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>11</sub>、P<sub>13</sub>については径0.1～0.15m程の柱痕跡（a層）を確認している。他のP<sub>7</sub>、P<sub>10</sub>、P<sub>12</sub>についても同様の柱痕跡の存在が予想される。主柱穴は径が0.2～0.3m程で、深さは深いもので0.5m程、浅いもので0.2m程となる。

柱間寸法は、いずれも芯々で、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>が2.01m（6.63尺―曲尺より、以下同じ）、P<sub>1</sub>とP<sub>14</sub>が1.47m（4.85尺）、P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>が1.52m（5.02尺）、P<sub>5</sub>とP<sub>7</sub>が1.28m（4.22尺）、P<sub>7</sub>とP<sub>9</sub>が1.38m（4.55尺）、P<sub>9</sub>とP<sub>10</sub>が1.46m（4.82尺）、P<sub>10</sub>とP<sub>11</sub>が1.45m（4.79尺）、P<sub>11</sub>～P<sub>12</sub>が1.61m（5.31尺）、P<sub>12</sub>とP<sub>13</sub>が1.77m（5.87尺）、P<sub>13</sub>とP<sub>1</sub>が0.94m（3.10尺）、P<sub>12</sub>とP<sub>2</sub>が1.27m（4.19尺）となる。また、これらの外にP<sub>3</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>13</sub>などの小柱穴も伴うがこれは補助的なものと思われる。

柱穴以外のピットはP<sub>14</sub>とP<sub>16</sub>で、P<sub>16</sub>は径0.5mと他よりもやや大きく、柱痕跡がない。P<sub>14</sub>は浅い溝状を呈し、周溝の一部の可能性がある。

遺物は出土量が少なく、床面から天目茶碗片1点と茶臼1点が、柱穴（P<sub>2</sub>）の掘り方から鉄砲玉と思われる鉛玉が1点が出土している。また、埋土中から青磁碗片1点と茶臼1点が出土している。

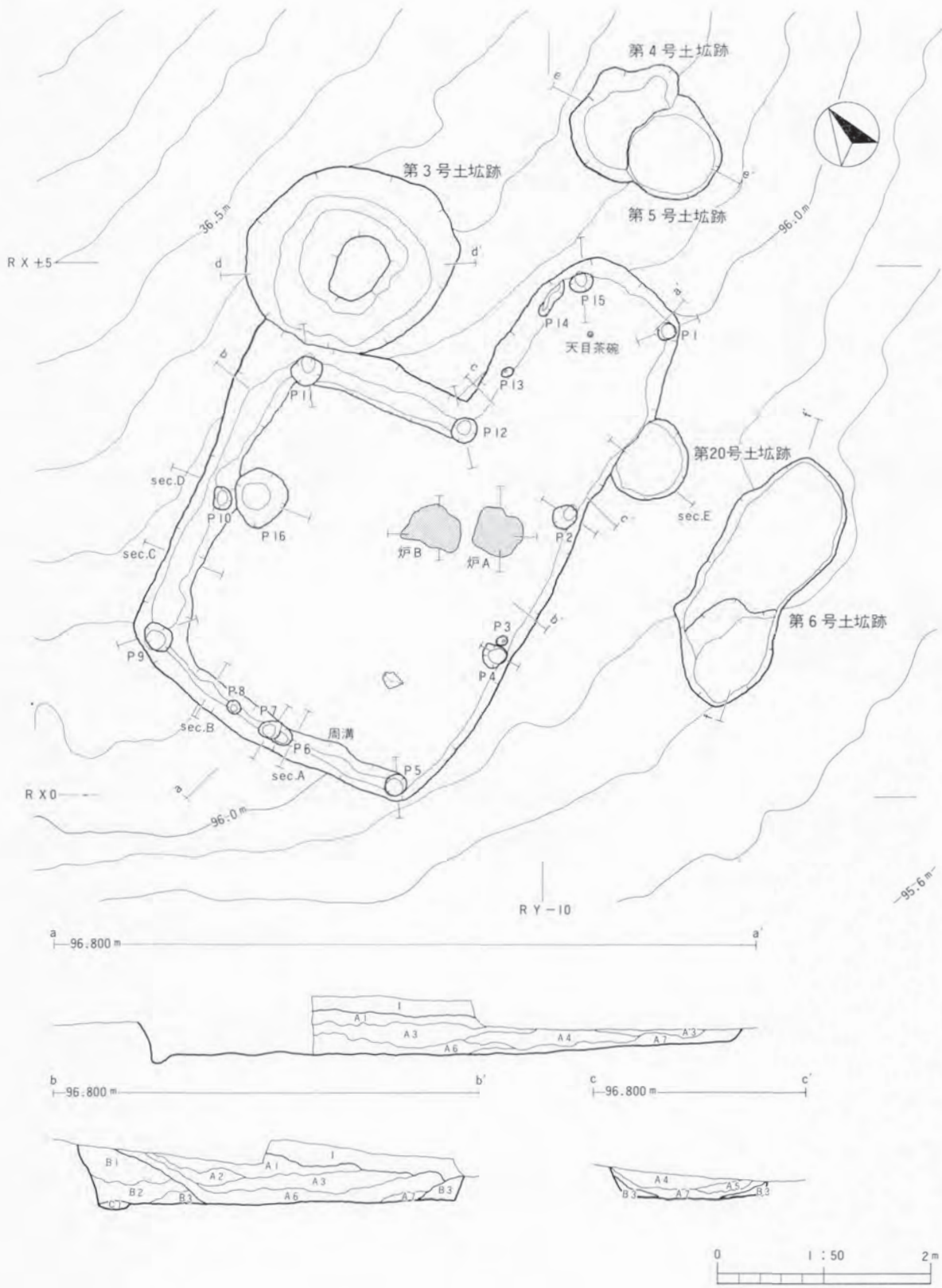
第10図2は青磁碗の破片で、小片のため法量は推定できない。外面の口縁部に2条の沈線を施し、内部にくずれた雷文を有する。体部にも施文されるがモチーフは不明である。

3は天目茶碗の破片で、高台の径は4.3cmを計る。内面にのみ茶褐色の釉がみられる。

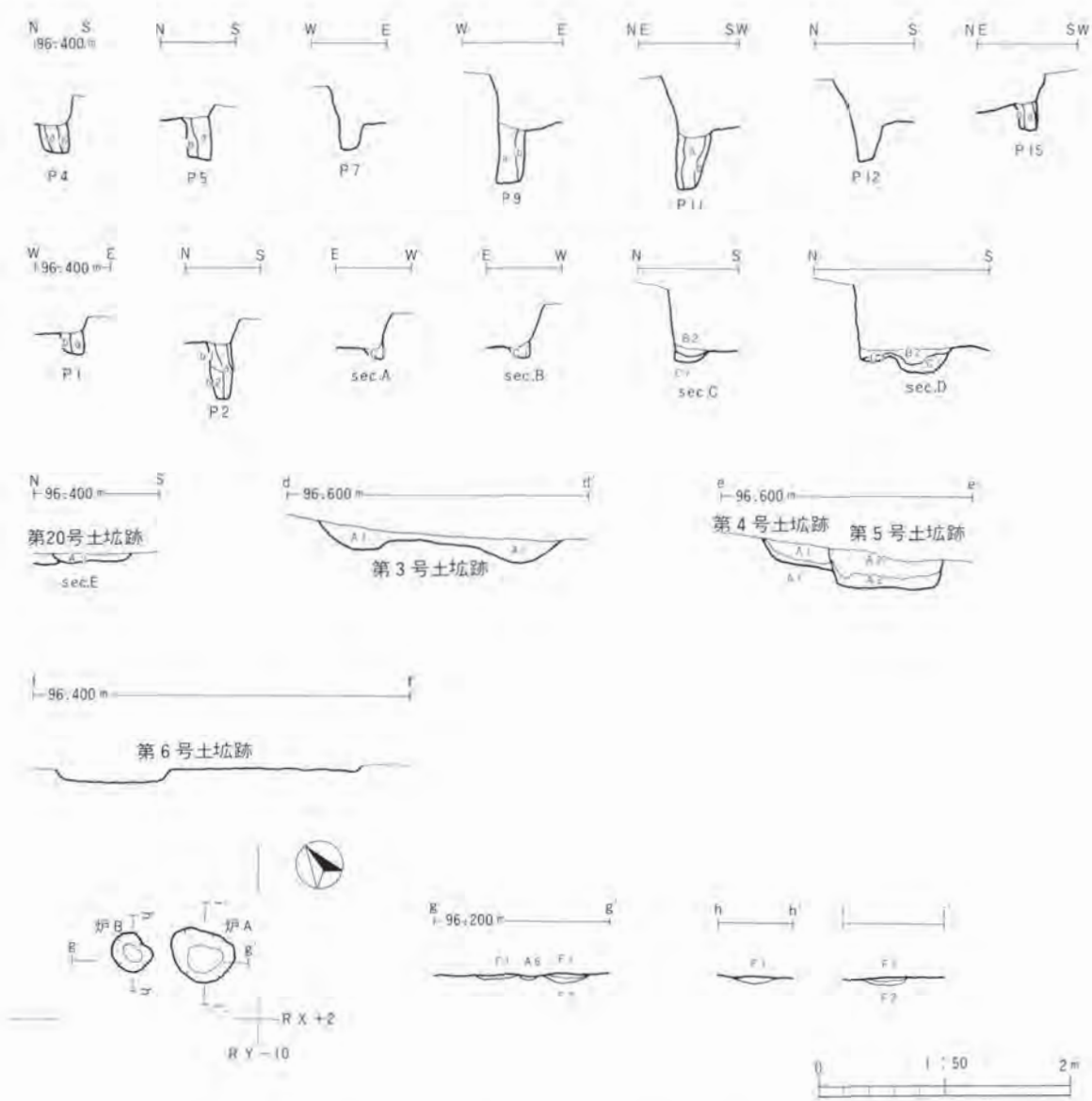
4は径1.4cm程の鉛玉で表面が白くさびついている。

6は茶臼（上臼）で、磨面には縁辺に達する15条の丸溝が認められる。溝の間隔は1.8～1.0cmとほぼ等間隔である。挽手孔は方形で、縦1.9cm以上、横2.7cmを計る。孔の周囲には2条の沈線などで、レリーフ状の施文がみられる。5は下臼で、受け皿部の破片である。厚さは1.8cm程であるが径は不明である。5、6ともにやや硬質の石材を用いるためか表面の磨滅も少な



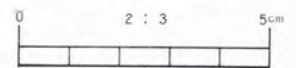
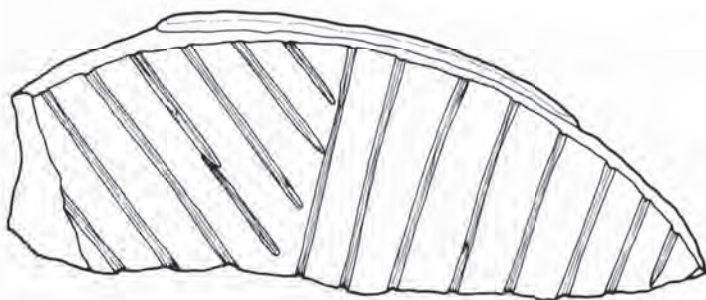
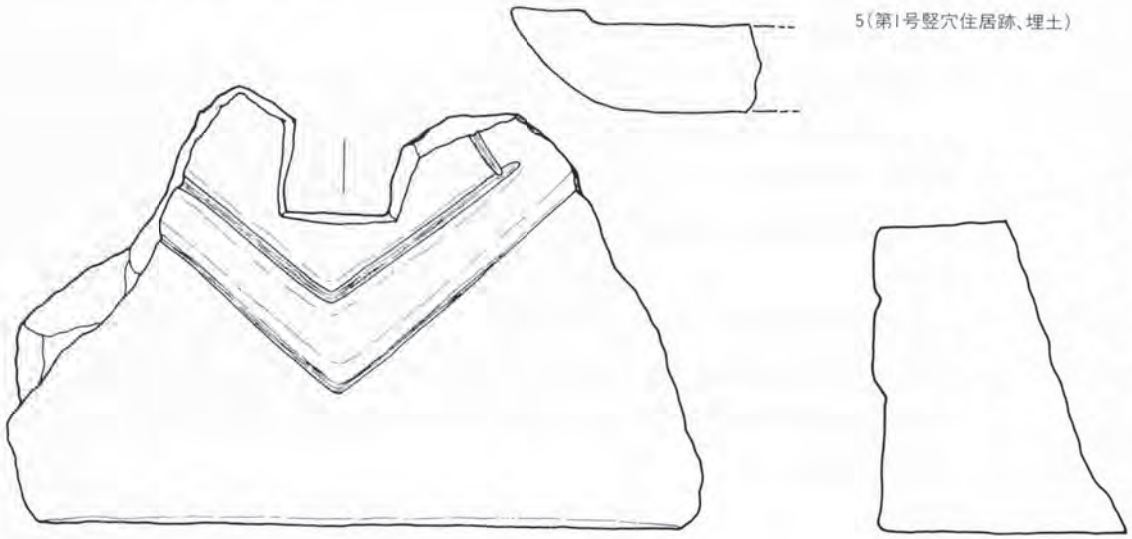
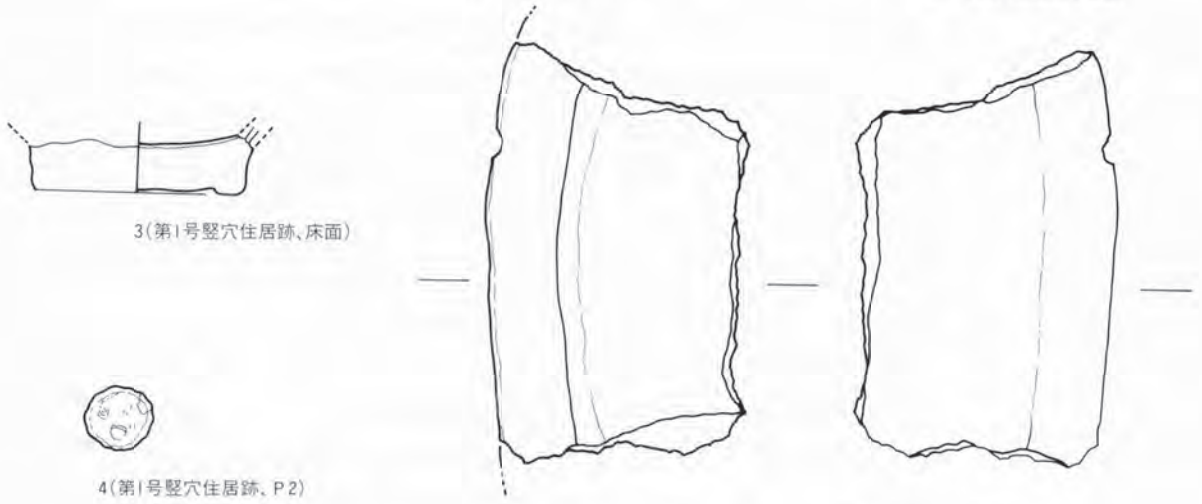


第8図 第1号竖穴住居跡、第3・4・5・6・20号土壇跡(I)



第9图 第1号竖穴住居迹、第3·4·5·6·20号土坛迹(2)





第10図 出土遺物

く、やや精緻な感じを受ける。おそらく、5、6は対になるものであろう。

#### 第2号掘立柱建物跡（第11図、第12図）

第1号竪穴住居跡の東21mに位置する。やや急な斜面を東西2.75m、南北7.4mの範囲で平坦な面を削平した上に建物跡を構築している。この削平部の埋土はA層とB層に大別される。

建物跡は、大略南北棟で、桁行3間、梁間2間となるもののやや不整形である。西側柱筋でとった主軸方向はN30°Eとなる。柱穴は、東側柱筋でP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>が柱痕跡を有する。P<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>の間にはP<sub>13</sub>があるものの掘り込みが浅く、柱痕跡を確認していない。西側柱筋では、P<sub>4</sub>～P<sub>7</sub>が相当するが、いずれも掘り込みが浅く、柱痕跡を確認できていない。また、桁行方向の中間にP<sub>8</sub>～P<sub>10</sub>を配す。P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>は掘り込みが深く、柱痕跡を有するが、P<sub>10</sub>は掘り込みも浅く、柱痕跡を確認していない。これらの柱穴の柱痕跡は、いずれもしまりのない暗褐色土が堆積し、掘方には暗褐色土塊を多く含む褐色土をつめる。

西側柱筋には柱穴間にP<sub>11</sub>、P<sub>14</sub>～P<sub>16</sub>の小ピットがみられるほか、建物跡の周囲にもP<sub>17</sub>～P<sub>19</sub>の小ピットがみられるが、いずれも性格は不明である。

A層は、暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や黒褐色土塊を少量含み、やや柔らかくしまりが無い。B層は、褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や黄褐色土塊を少量含み、やや柔らかくしまりが無い。尚、A層から陶器片が出土している。

柱間寸法は不整であり、それぞれ芯々で、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>が3.8m（12.54尺—曲尺より、以下同じ）P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>が2.9m（9.57尺）、P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>が1.9m（6.27尺）、P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>（東側柱筋上に補正して）が2.29m（7.56尺）、P<sub>6</sub>とP<sub>7</sub>（同前）が2.35m（7.76尺）、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>が3.31m（10.92尺）、P<sub>3</sub>とP<sub>10</sub>が（南妻上に補正して）が2.52m（8.32尺）、P<sub>10</sub>とP<sub>7</sub>（前同）が1.83m（6.14尺）となる。

出土遺物は第10図1のみで、削平部埋土A層中より出土している。染付茶碗の口縁部付近破片で、体部から口縁部にかけて、やや外反気味に立ち上がる。推定される口径は13.2cmである。

外面の口縁部に同様のモチーフを連続した施文がみられる外、体部にも施文されるがモチーフは不明である。

#### 第3号遺構（第13図、第14図）

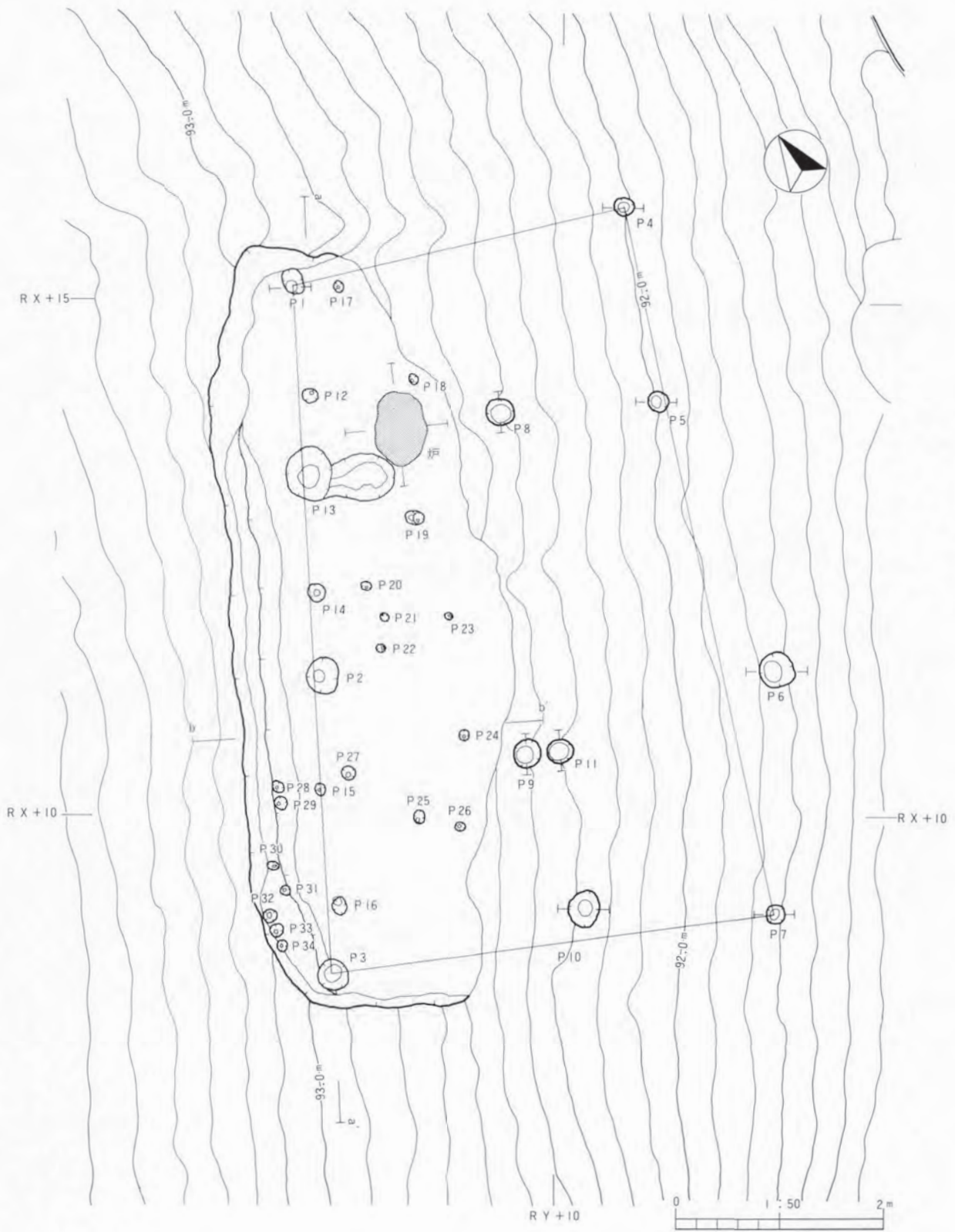
第2号掘立柱建物跡の南13mに位置する。平面形は不整な長方形で、各辺を溝や連続するピットで区画される。

規模は各々推定で、北辺が4.98m程、東辺が7.87m程、南辺が4.94m程、西辺が8.3m程である。

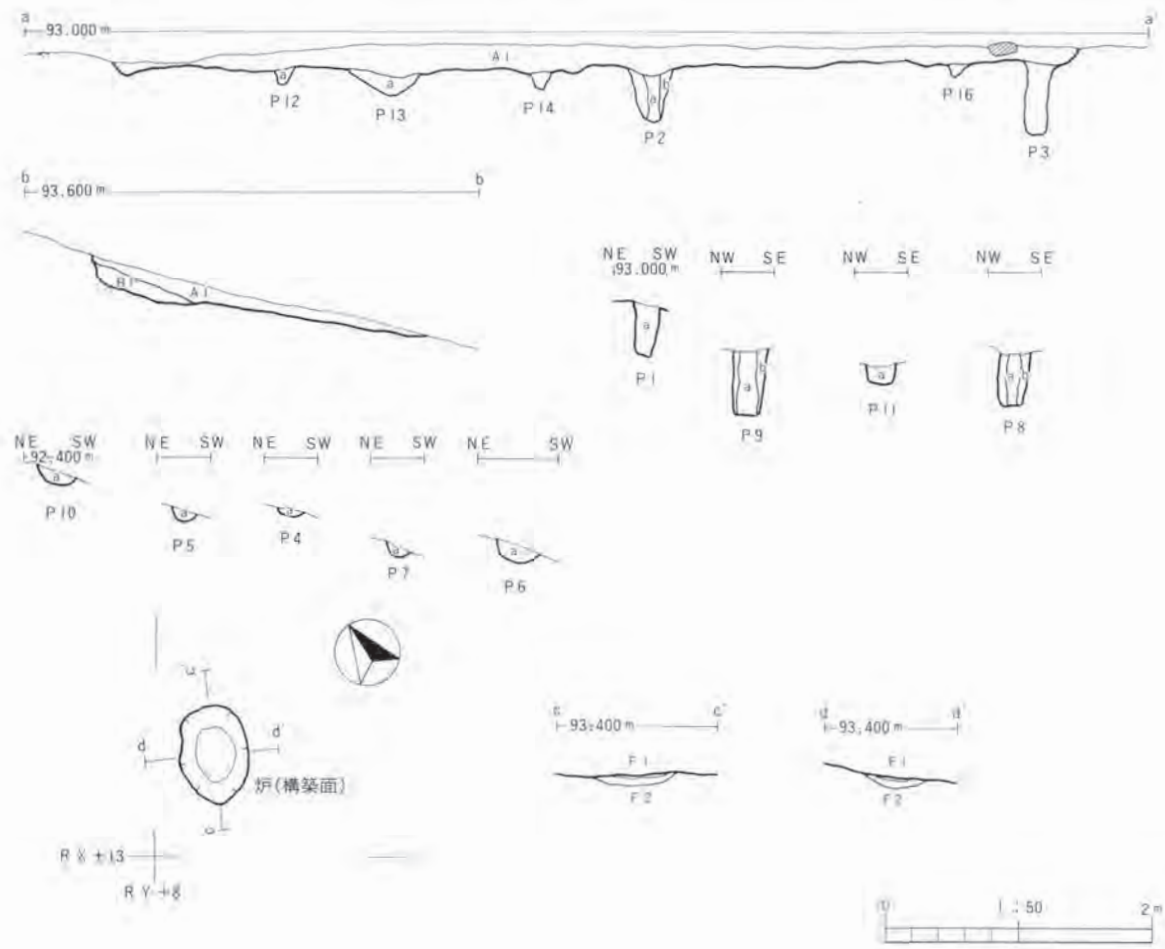
溝やピットはいずれも掘り込みが浅く、しまりのない暗褐色土が堆積する。建物跡である可能性もあったため柱穴の検出に努めたが、これに相当するものもなく、また、平坦な面の造成もみられないなど理由により、建物とはならないと判断した。

出土遺物は皆無であった。



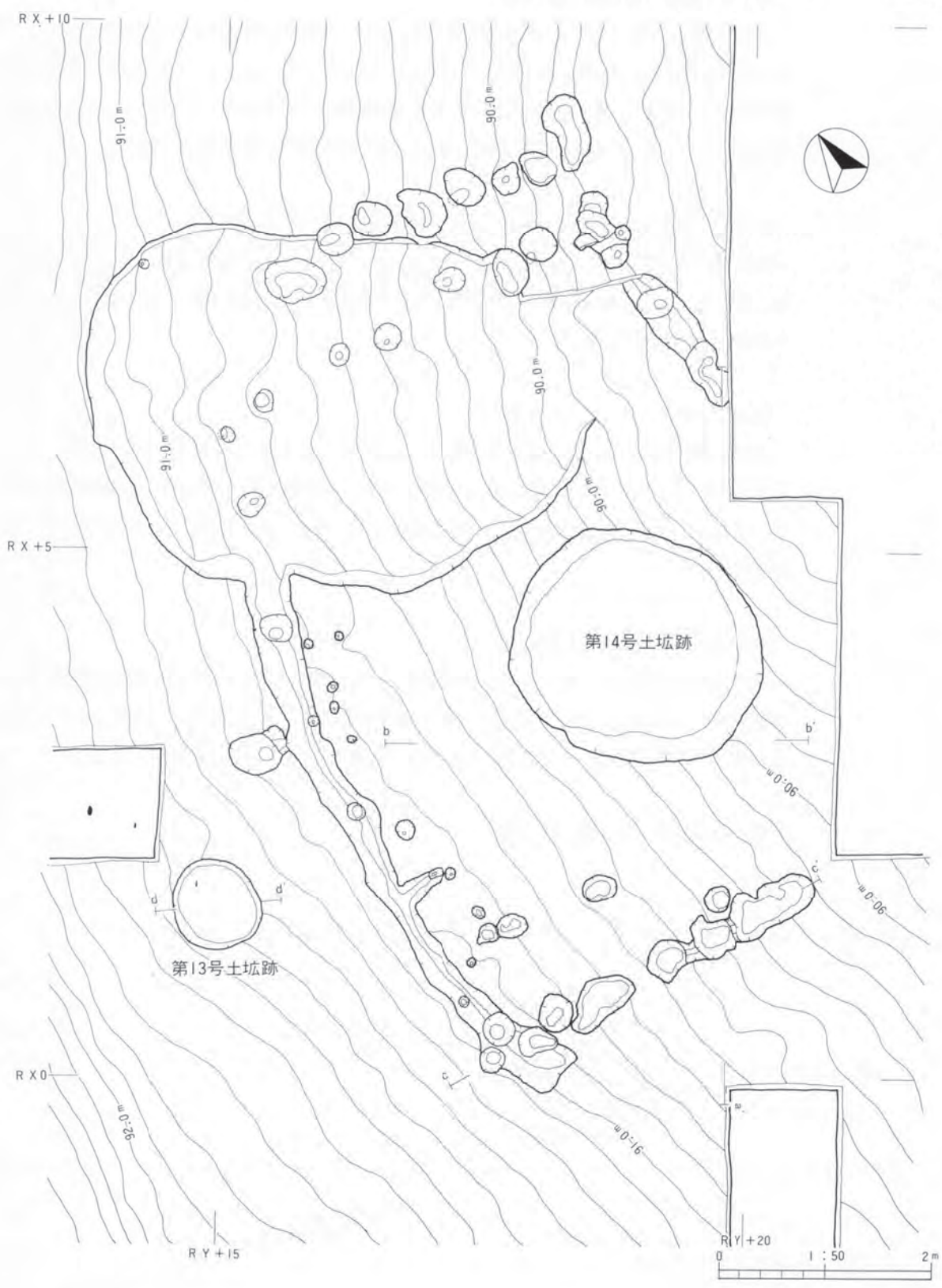


第11图 第2号掘立柱建物跡



第12图 第2号掘立柱建物跡土层断面图





第13図 第3号遺構、第13・14号土坛跡

第1号土坑跡 (第15図、第19図)

A区西端部に位置する。平面形は大略円形を呈し、規模は1.5×1.4mで、深さは0.32mを計る。壁は西半部が2段に掘り込まれる。埋土は、褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を混入する。A1層は混入土が少なく柔らかいが、A2層は比較的混入土が多く、やや固い。いずれの層もあまりしまりが無い。出土遺物は無い。また、検出時の輪郭が極めて明瞭だった。

第2号土坑跡 (第15図、第19図)

A区西部に位置する。平面形は大略円形を呈し、規模は直径が1.6mで、深さは0.15mを計る。埋土は、やや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土をやや多く含む。柔らかくあまりしまりが無い。出土遺物は無い。

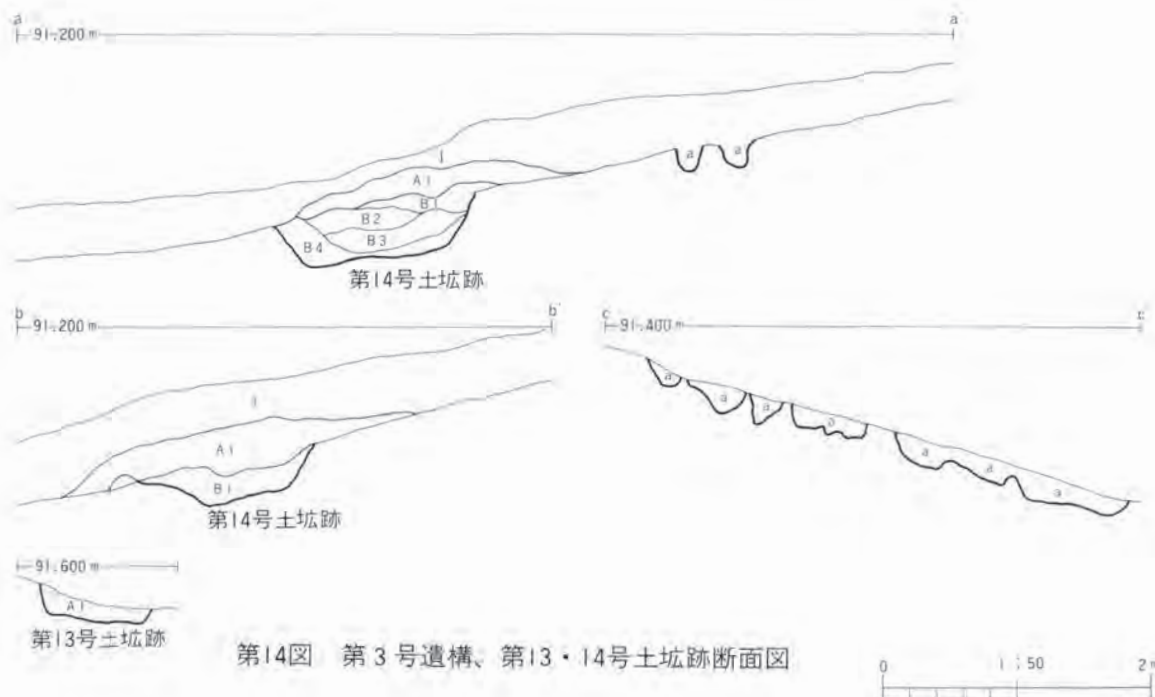
第3号土坑跡 (第8図、第9図)

A区西部に位置する。第1号竪穴住居跡と重複し、これを切る。平面形は不整形円形を呈すが、中央部が掘り残され、環状の溝のような構造となる。規模は1.7m×2.0mで、深さは0.2mを計る。埋土は、黄褐色土を基本土とし、褐色土塊を多く含む。やや柔らかくしまりが無い。出土遺物は無い。

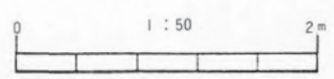
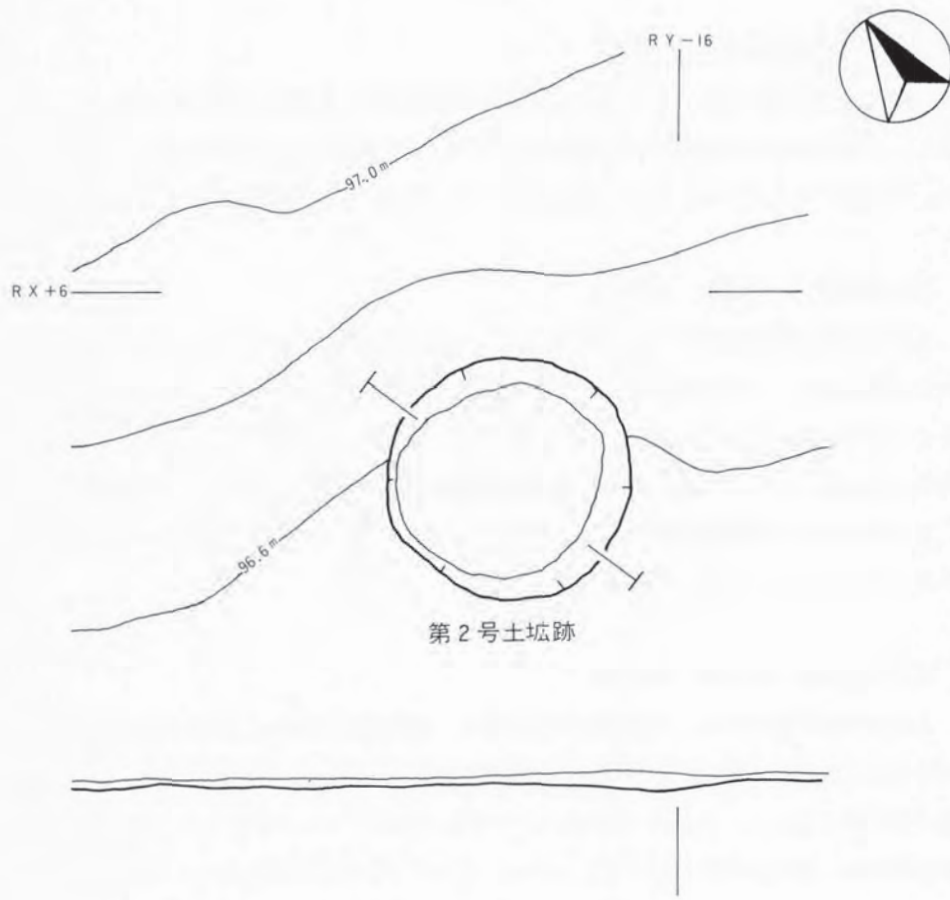
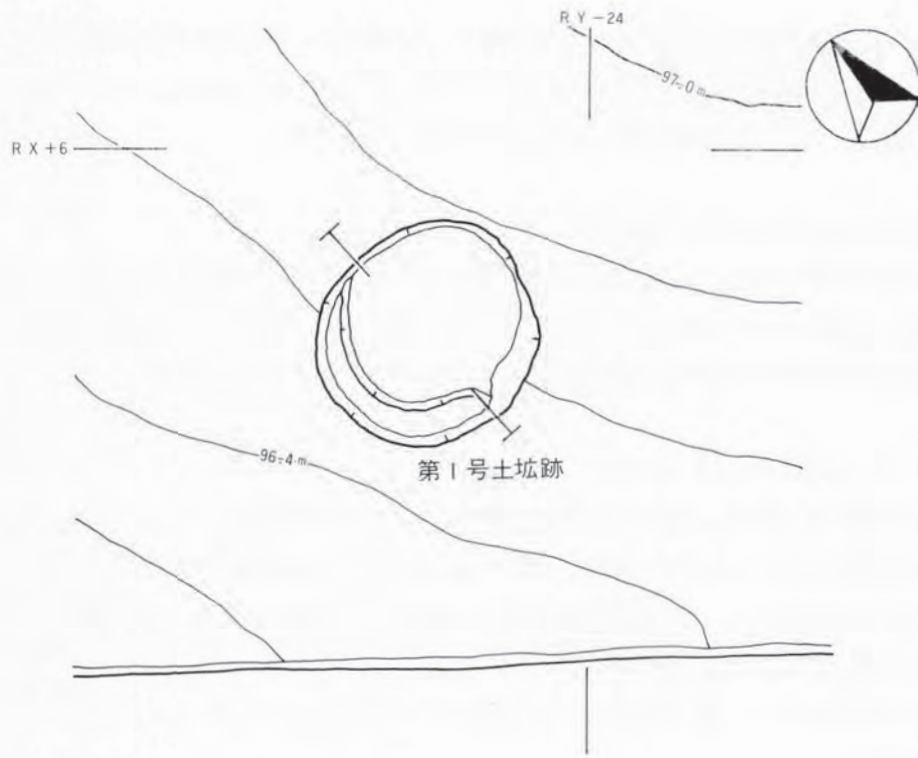
第4号土坑跡 (第8図、第9図)

A区西部に位置する。第5号土坑跡を重複し、これに切られる。平面形は不整形円形で、規模は直径が1.2mほどで、深さは0.18mを計る。埋土は、やや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかく、あまりしまりが無い。出土遺物は無い。

第5号土坑跡 (第8図、第9図)







第15図 第1、2号土坑跡

A区西部に位置する。第4号土壇跡と重複し、これを切る。平面形は不整形円形を呈し、規模は、直径が0.9mほど、深さは0.3mを計る。埋土は、黄褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊を含む。やや柔らかくあまりしまりが無い。出土遺物は無い。

#### 第6号土壇跡（第8図、第9図）

A区西部に位置する。平面形は不整形円形を呈し、底面は一部2段に掘り込まれ、やや凹凸がある。規模は2.5m×1.05m、深さは0.08mを計る。埋土は、やや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊をわずかに含む。やや柔らかくあまりしまりが無い。出土遺物は無い。

#### 第7号土壇跡（第16図、第19図）

A区西部に位置する。平面形は不整形円形を呈し、規模は、直径が0.8mほどを計る。また、地山面までの深さは0.2mを計る。埋土は、A層、B層、C層に大別される。A層はやや明るい褐色土を基本土とし、焼土塊を少量含む。やや柔らかくしまりが無い。炭化物粒を含む。B層は焼土層で、あまり固くはなくしまり具合も中程度である。炭化物粒を少量含む。C層は黄褐色土を基本土とし、混入土はほとんど含まない。やや固くしまっている。構築土に相当するものが。

#### 第8号土壇跡（第16図、第19図）

A区中央部南端に位置する。平面形は不整形円形を呈し、規模は1.2×0.95m、深さ0.2mを計る。底面はやや凹凸が著しい。埋土はA層で、やや明るい褐色土を基本土とし黄褐色土を含む。炭化物粒も少量含む。また、埋土中からブリキの様な薄い鉄板が出土している。

#### 第9号土壇跡（第17図、第19図）

A区中央部南端に位置する。平面形は不整形円形で、規模は直径1.0m、深さ0.2mを計る。埋土はA層、B層、C層に大別される。A層はA<sub>1</sub>層がやや明るい褐色土を基本土とし明褐色土をやや多く含み、A<sub>2</sub>層がやや明るい暗褐色土を基本土としやや明るい褐色土を多く含む。やや柔らかくあまりしまりが無い。B層は焼土層で暗褐色土塊などを含む。やや柔らかくあまりしまりが無い。C層は明黄褐色土を基本土とし、混入土はほとんど含まない。やや柔らかくあまりしまりが無い。出土遺物は無い。

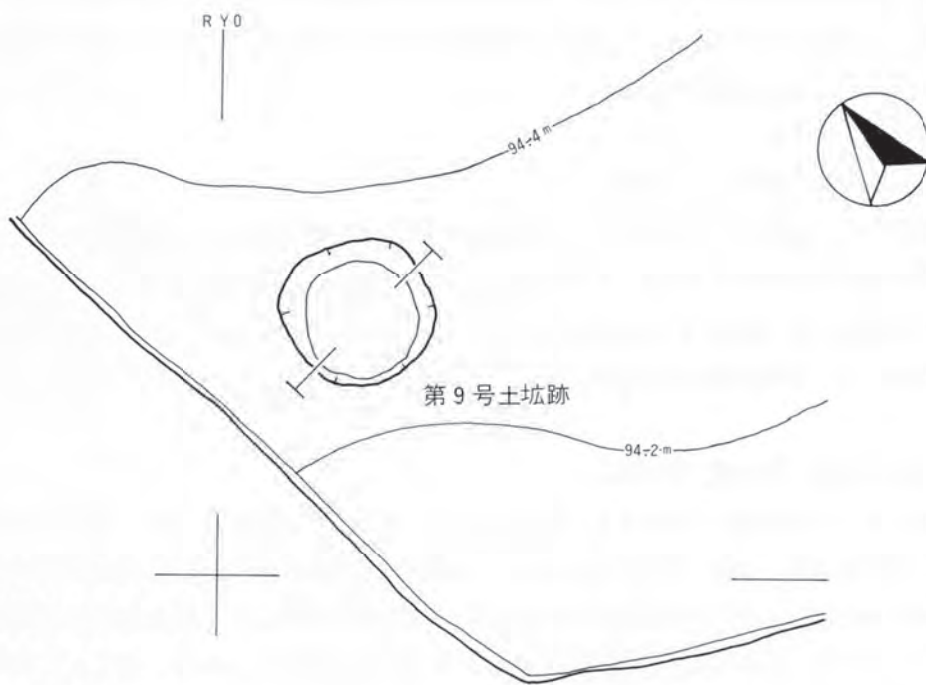
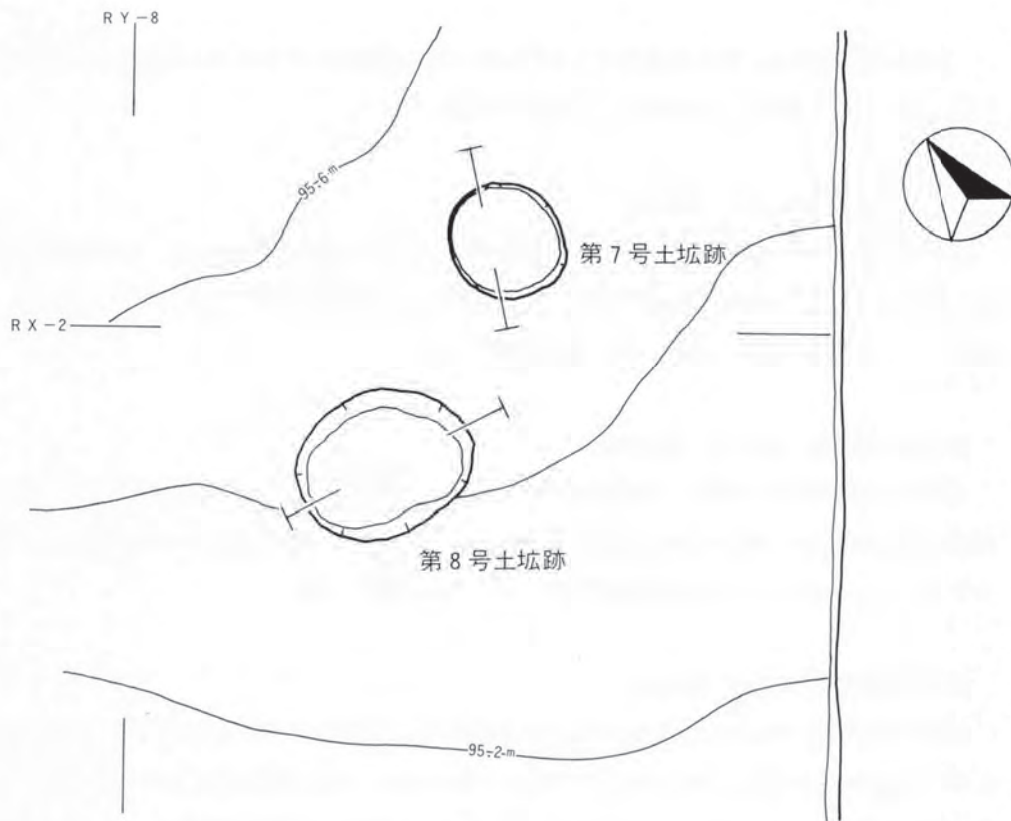
#### 第10号土壇跡（第17図、第19図）

A区中央部に位置する。平面形は不整形円形で、規模は直径2.0m、深さ0.2mを計る。埋土はA層で、3層に細分される。A<sub>1</sub>層、A<sub>2</sub>層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊を含むが、A<sub>1</sub>層で特に多く混入し、A<sub>2</sub>層では少ない。いずれも固くややしまりがある。A<sub>3</sub>層は明黄褐色土を基本土とし混入土は全く含まれていない。掘りすぎの可能性が大きい。出土遺物は無い。

#### 第11号土壇跡（第17図、第19図）

A区中央部に位置し、第10号土壇跡に隣接する。平面形は不整形円形を呈し、規模は直径1.9m、





第16图 第7、8、9号土坛迹

深さ0.25mを計る。埋土はA層で、やや粘性のある黄褐色土を基本土とし褐色土塊を少量含む。やや固く比較的しまっている。出土遺物は無い。

#### 第12号土坑跡（第17図、第19図）

A区中央部東寄りに位置する。平面形は不整形を呈し、規模は直径0.6m、深さ0.2mを計る。埋土はA層で、やや粘性のある褐色土を基本土とし、黄褐色土や黒褐色土を少量含む。固さ、しまりとも中程度である。出土遺物は無い。

#### 第13号土坑跡（第13図、第14図）

A区中央部東寄りに位置し、第12号土坑跡や第3号遺構に隣接する。平面形はだ円形を呈し、規模は0.9m×0.8m、深さ0.2mを計る。埋土はA層で、褐色土と黄褐色土とがほぼ半数ずつ混合する。やや柔らかくしまりは中程度である。出土遺物は無い。

#### 第14号土坑跡（第13図、第14図）

A区中央部東端の第3号遺構のほぼ中央に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は直径2.4m、深さ0.4mを計る。埋土はA層とB層に大別される。A層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。やや柔らかくあまりしまりが無い。B層は4層に細分され、B<sub>1</sub>層は黒褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。B<sub>2</sub>層とB<sub>3</sub>層はやや明るい暗褐色土を基本土とし黄褐色土塊を含むが、B<sub>2</sub>層で特に多い。B<sub>4</sub>層はやや暗い暗褐色土を基本土とし黄色褐色土を少量含む。B層はいずれも固さ、しまりとも中程度であるがB<sub>1</sub>層が最も固い。出土遺物は無い。第3号遺構との関係は不明である。

#### 第15号土坑跡（第18図、第19図）

A区トレンチ部東寄りに位置する。平面形は円形で、規模は直径0.4m、深さ0.05mを計る。埋土はA層で2層に細分される。A<sub>1</sub>層は焼土層で、褐色土を含むが比較的焼けてしまっている。A<sub>2</sub>層はにぶい黄褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を含み、固くしまっている。構築土層かと思われる。焼成は受けていない。出土遺物は無い。

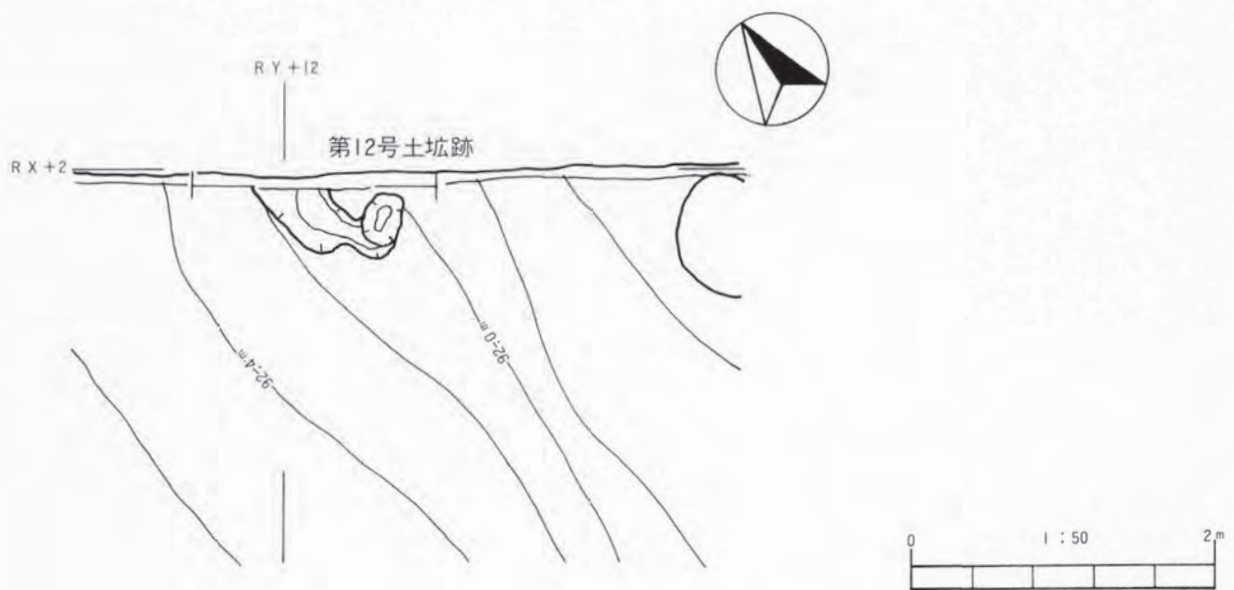
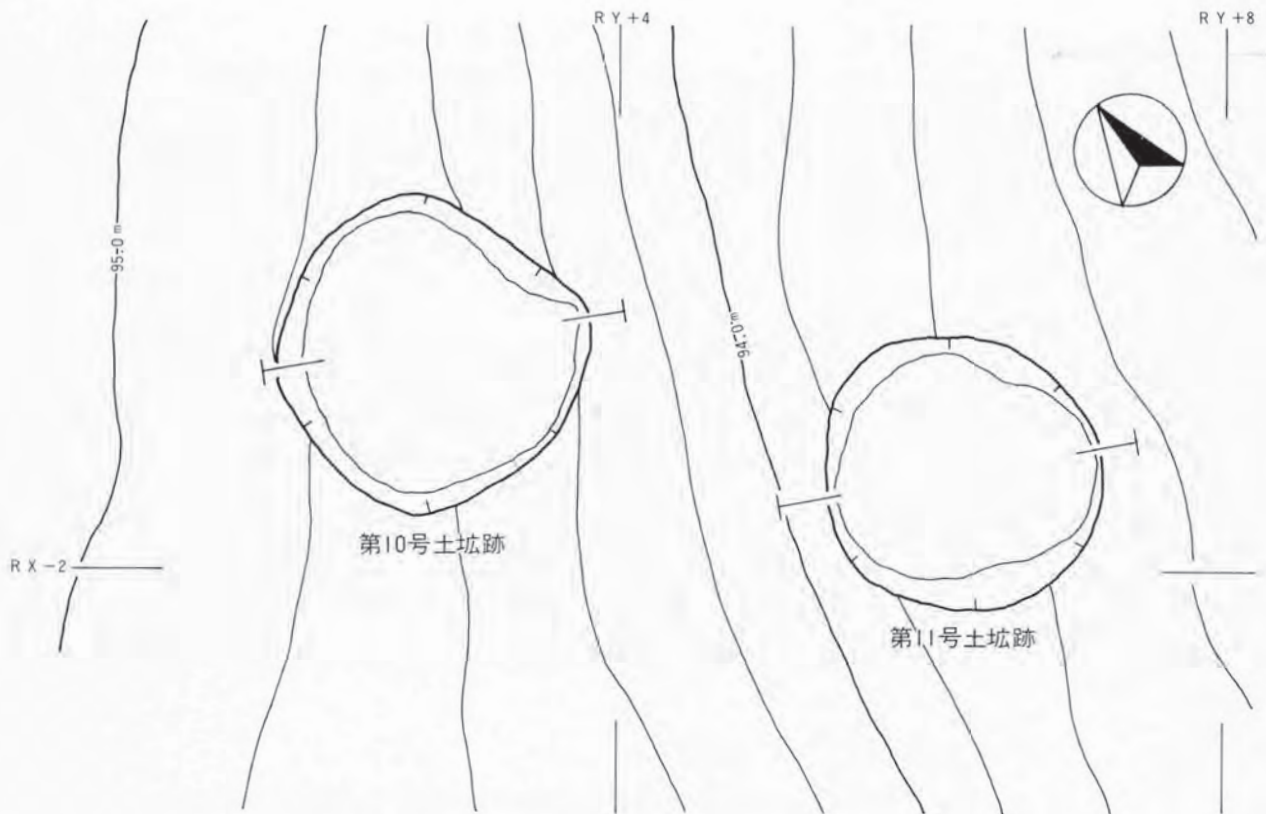
#### 第16号土坑跡（第18図、第19図）

A区トレンチ部東寄りに位置する。平面形は不整形で、規模は直径0.8m、深さ0.15mを計る。埋土はA層、B層、C層に大別される。A層は黄褐色土を基本土とし、焼土粒をわずかに含む。やや固くしまりは中程度である。B層は2層に細分される。B<sub>1</sub>層は焼土層で固く焼けてしまっている。B<sub>2</sub>層も焼土浸透層であるがやや焼け具合が少ないものの、固くしまっている。C層は黄褐色土とし、焼土粒をわずかに含み、固くしまっている。構築土かと思われる。出土遺物は無い。

#### 第17号土坑跡（第18図、第19図）

A区トレンチ部東寄りに位置する。平面形は不整形で、規模は直径0.8m、深さ0.15mを





第17图 第10、11、12号土坛跡

計る。埋土はA層、B層、C層に大別される。A層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土を含み、固くしまっている。B層は2層に細分される。B<sub>1</sub>層は黄褐色土を基本土とし、焼土塊を含み、固くしまっている。B<sub>2</sub>層はやや固くしまりは中程度である。構築土かと思われる。出土遺物は無い。

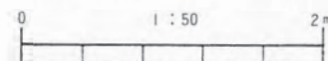
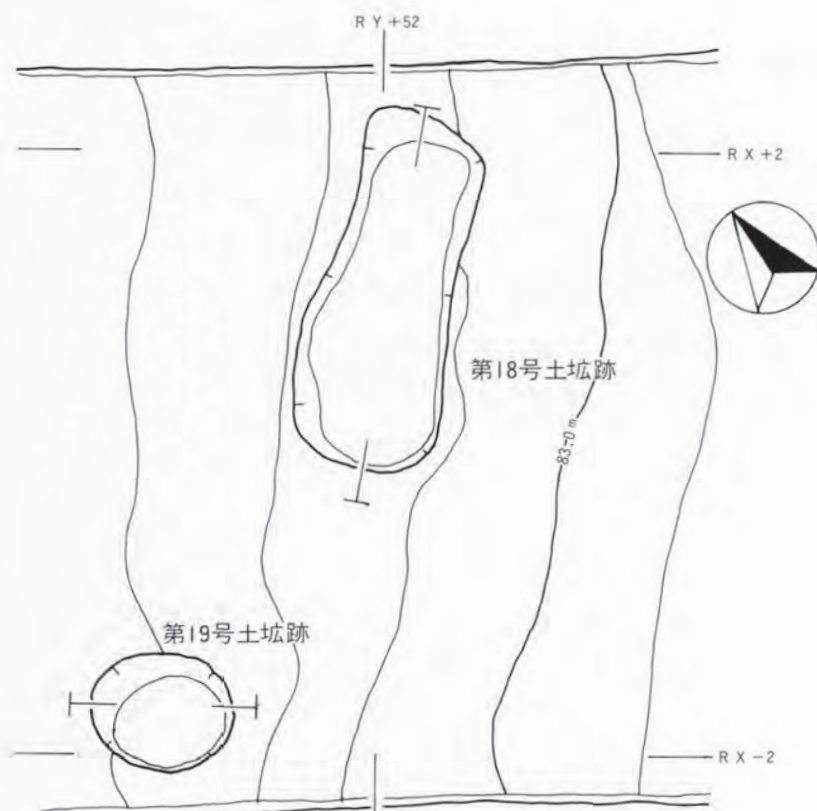
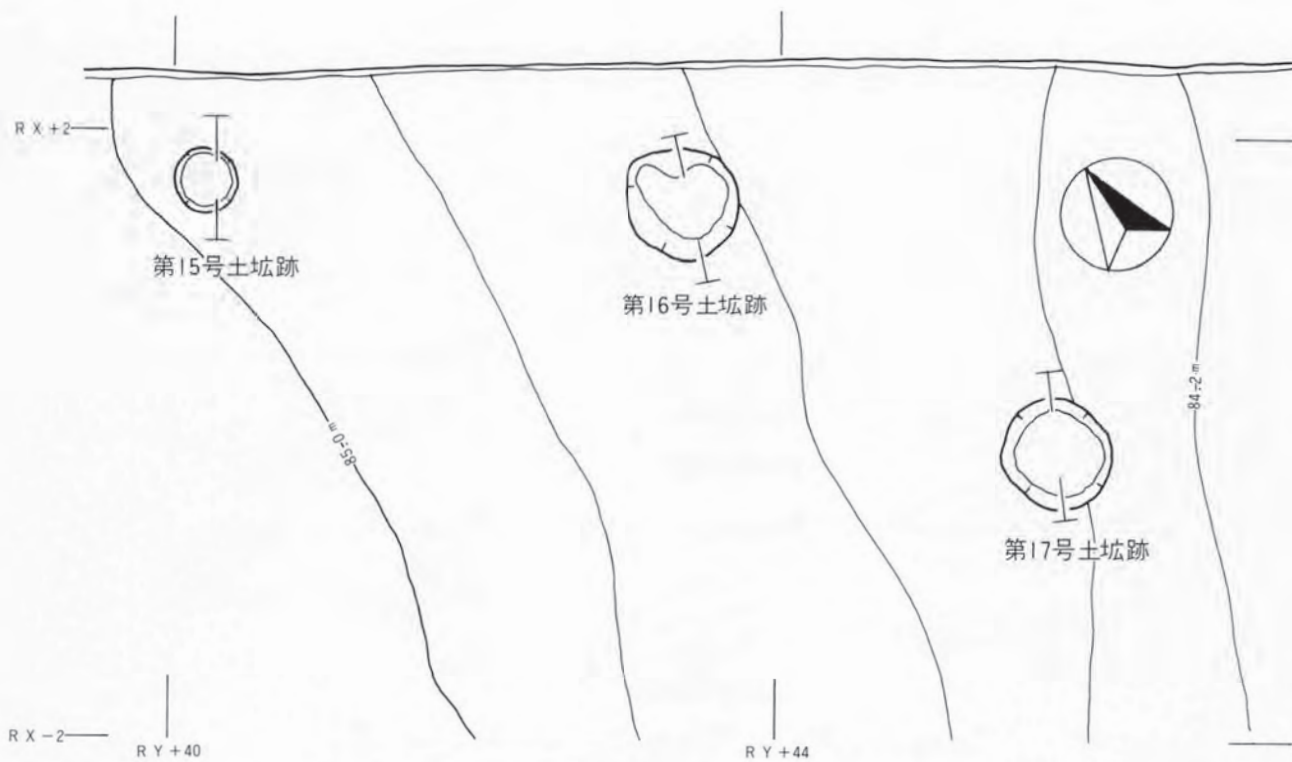
#### 第18号土壇跡（第18図、第19図）

A区トレンチ部東寄りに位置する。平面形は不整長方形で、規模は2.3m×1.0m、深さ0.2mを計る。埋土はA層とB層に大別される。A層は2層に細分され、A<sub>1</sub>層は暗褐色土と明褐色土（焼土）との混合土層で、固さ、しまりとも中程度である。A<sub>2</sub>層は暗褐色土を基本土とし、褐色土や焼土粒を少量含む。固さ、しまりとも中程度である。A<sub>3</sub>層は暗褐色土を基本土とし、黄褐色土や黒褐色土を少量含む。固さ、しまりとも中程度である。B層は2層に細分される。B<sub>1</sub>層は褐色土を基本土とし、黄褐色土を含む。固さ、しまりとも中程度である。B<sub>2</sub>層は黄褐色土を基本土とし、焼土粒を多く含む。やや固くしまりがある。出土遺物は無い。

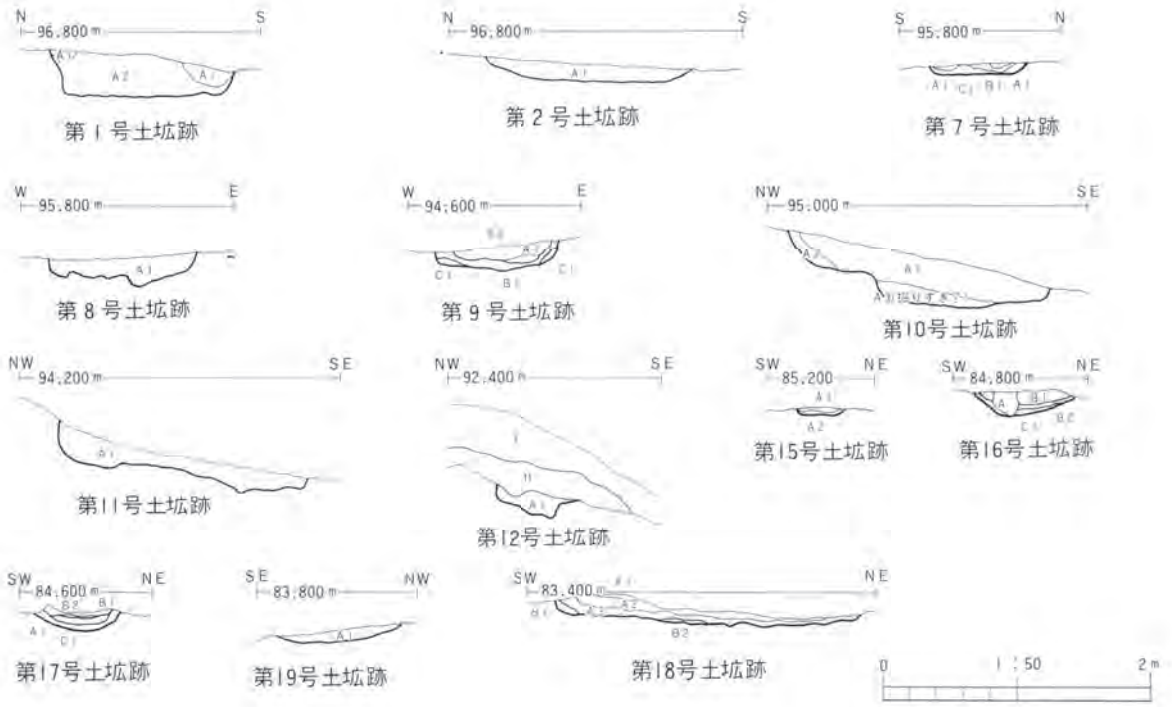
#### 第19号土壇跡（第18図、第19図）

A区トレンチ部東寄りに位置する。平面形は不整だ円形で、規模は0.9m×0.8m、深さ0.1mを計る。埋土はA層で、暗褐色土を基本土とし、黄褐色土や焼土塊を多く含む。やや固いがしまりは中程度である。出土遺物は無い。





第18図 第15、16、17、18、19号土坛跡



第19图 土坑迹土层断面图



## IV 調査のまとめ

今回の調査で検出した遺構は前述したように竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、不明遺構1基、土坑跡20基である。これらのうち伴出遺物等により時期を特定できたのは、竪穴住居跡と掘立柱建物跡のみである。

竪穴住居跡からの出土遺物のうち、青磁碗（破片）と天目茶碗（底部）はほぼ15c～16c代に伴うものと思われる（註1）。更に、柱穴の堀方埋土中から鉄砲玉が出土していることは、この竪穴住居跡の構築が16c後半以降に限定されると言える。下限については、青磁碗（破片）が埋土中から出土していることや近世陶器等の近世の遺物が伴出していないことから17c代へ下る可能性は極めて小さいと言える。つまり、竪穴住居跡の構築～廃棄はほぼ16c後半代におさまるものと思われる。また、掘立柱建物跡についてもほぼ同様な年代観を与えることができるものと思われる。

次にこれらの性格についてであるが、県内で竪穴住居跡や掘立柱建物跡がセットで検出される遺跡としては城館跡が一般的であるといえる。しかし、熊野町遺跡の場合は城館跡にみられる郭、帯郭、空掘りといった遺構が全く検出されていない。これは調査区以外でも同様である（地表面からの観察およびボーリングによる）。

また、出土遺物についても、青磁や染付の舶載陶磁器、天目茶碗や茶臼の茶道具、更に武器（鉄砲玉）といった組み合わせが、いかにも城館跡からの出土遺物の構成に類似している。

ところで、熊野町遺跡に隣接する中世の遺跡としては鉄ヶ崎館（鉄ヶ崎貝塚・鉄ヶ崎館山貝塚）があり、直線距離で約500mを計る。両者は指呼の間に望める距離である。

江戸時代後期の宮古地方の史家白根光久によって著わされた『東奥古伝 閉伊之巻』によると鉄ヶ崎館については、「是は昔 館の腰まで浪打寄せたるなり。近能 黒田の館に住したるは夷の押えなり因りて鉄ヶ崎の海辺に砦を築き、立番の兵を置き守らせたるなりと云う。（中略）今の宮古町は其後元和年中よりの名なり。勿論七戻りなど更になし。旧館の今の田形には大木の林あり。夏保峠通り一円なし。唯、黒田本城より鉄ヶ崎の砦に通う所あり。今の日影の沢へ通る道なり。（後略）」とある（註2）。これによると近能氏は（千徳氏のための）“夷の押え”を目的として黒田館に在城していたが、さらにその責務を推進するために鉄ヶ崎の海辺に砦（鉄ヶ崎館）を築いたこととなる。また、“夷の押え”については、蝦夷（アイヌ人）や南蛮人（外国人）を対象としたものとも読みとれるが、自領の海岸線防備、漁業権・交易権などの確保、交通（特に海路）の監視などを日常的な業務としていたと考えるのが妥当であろう。鉄ヶ崎館に立つと宮古湾から重茂半島、白木山までは眺望できるが白木山以北の海岸線を眺望することができない。一方、熊野町遺跡からは白木山以北の海岸線を眺望することができる。

熊野町遺跡は、遺構や遺物の組み合わせ、立地および鉄ヶ崎館の関係から類堆して、鉄ヶ崎館から死角となる北方の海岸線を監視する番所（見張り台）の様な性格を有する遺跡ではなかったかと思われる。これを図式化すると以下のとおりとなる。

〈本 城〉      〈支 城〉      〈枝城・砦〉      〈番 所〉  
千徳城   ←→   黒田館   ←→   鉄ヶ崎館   ←→   熊野町遺跡

鉄ヶ崎館

『東奥古伝』

前述したとおり熊野町遺跡の存続期間はほぼ16c後半代に求めることができた。また、千徳城については創建年代が確定していないものの、終末については豊臣秀吉の奥州仕置に伴い天正20年(1592)に破却されている(註3)。熊野町遺跡は千徳城の最終段階に共伴する可能性は大きい。黒田館と鋏ヶ崎館の2城については存続期間が未確定であるため、今後はこれを確認するための調査が必要となる(註4)。同時に、4者を関連づける調査資料の蓄積が望まれる。

最後に、土壇跡と不明遺構についてであるが、土壇跡はブリキの様な鉄板を検出した第11号土壇跡が近～現代に伴うものと思われる。また、第1号堅穴住居跡を切る第3号土壇跡、第20号土壇跡や検出時の輪郭が明瞭だった第1号土壇跡などは新しい可能性も考えられる。これ以外の土壇跡も中世以降に伴うものであろうが、畑の耕作時に掘られたものも含まれていると思われる。尚、これらの土壇跡のなかには焼土層を伴うもの(第7、9、15～18号土壇跡)もありA区南寄りやA区トレンチ部東寄りといった鋏ヶ崎館に寄った部分に立置している。想像を逞しくすれば狼煙を上げた跡とも考えられるが、あくまで推論の域を出るものではない。従って土壇跡についてはすべて年代、性格ともに不明と言わざるを得ない。同様に第3号遺構についても不明である。

#### 〈註記〉

註1 本遺跡から出土した遺物はすべて昆野靖氏(岩手県埋蔵文化財センター)に実見していただき御教示を得た。この場を借りて深く感謝の意を表したい。

註2 白根光久 『東奥古伝 閉伊之巻』

註3 「南部大膳大夫分国内諸城破却共書上之事」(『聞老遺事』(梅内祐訓著)、『篤焉家訓』(市原篤焉著)等)

註4 鋏ヶ崎については宮古測候所の建替工事に伴い平成元年度に主郭に相当する平場の一部の発掘調査を実施したが、縄文～平安時代の遺構は検出したものの中世に伴う遺構や遺物は検出されなかった。詳細は平成2年度に報告予定。

#### 〈参考文献(前述したものは除く)〉

1983 田村忠博 『宮古地方の中世史 古城物語』

1986 岩手県教育委員会『岩手県中世城館跡 分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集



写 真 图 版







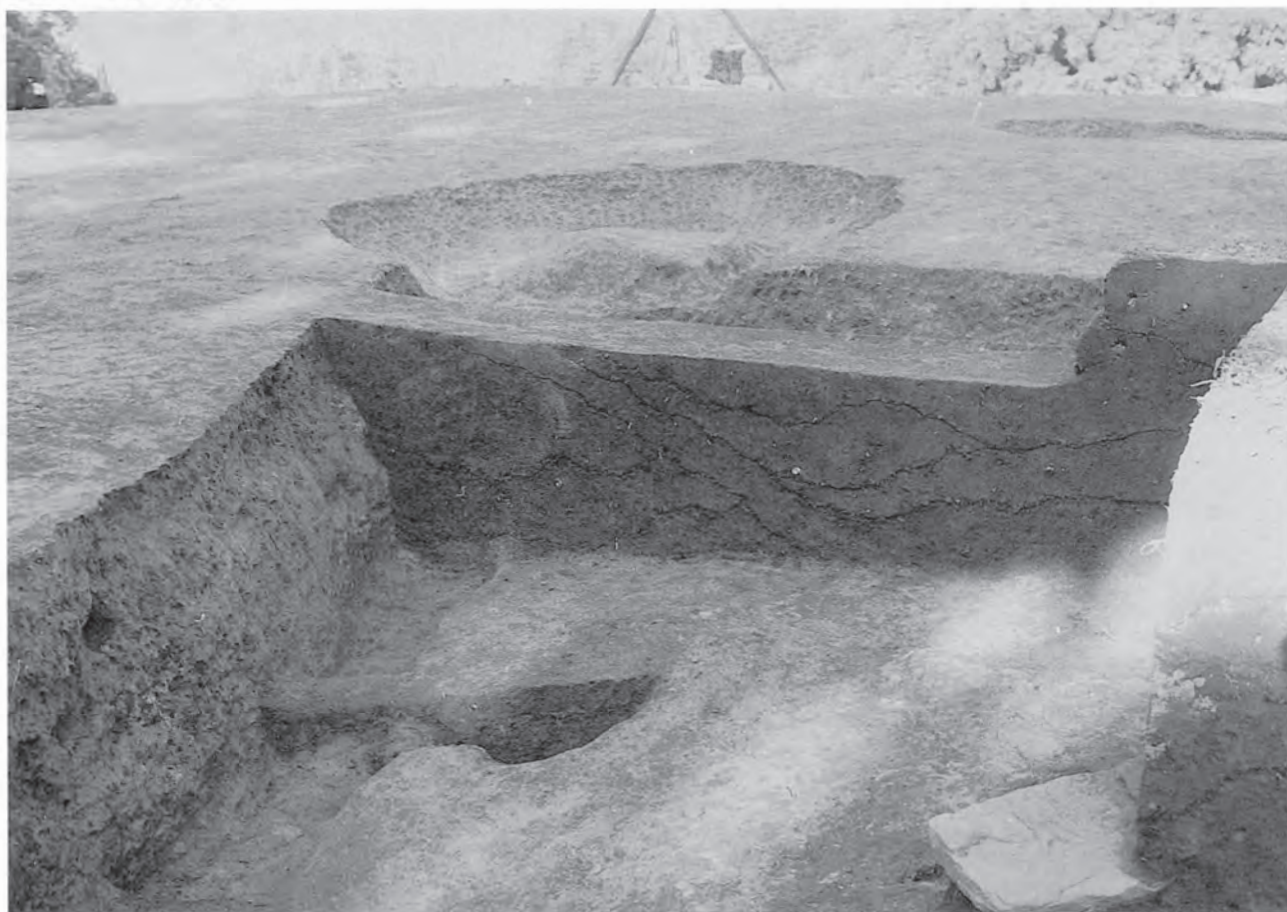
第 1 号竖穴住居跡 (完掘状況)



第 1 号竖穴住居跡 (完掘状況)



## 第2図版



第1号竖穴住居跡（堆積状況）



第1号竖穴住居跡（堆積状況）





張り出し部堆積状況



遺物出土状況（茶臼）



## 第4図版



遺物出土状況（茶臼）

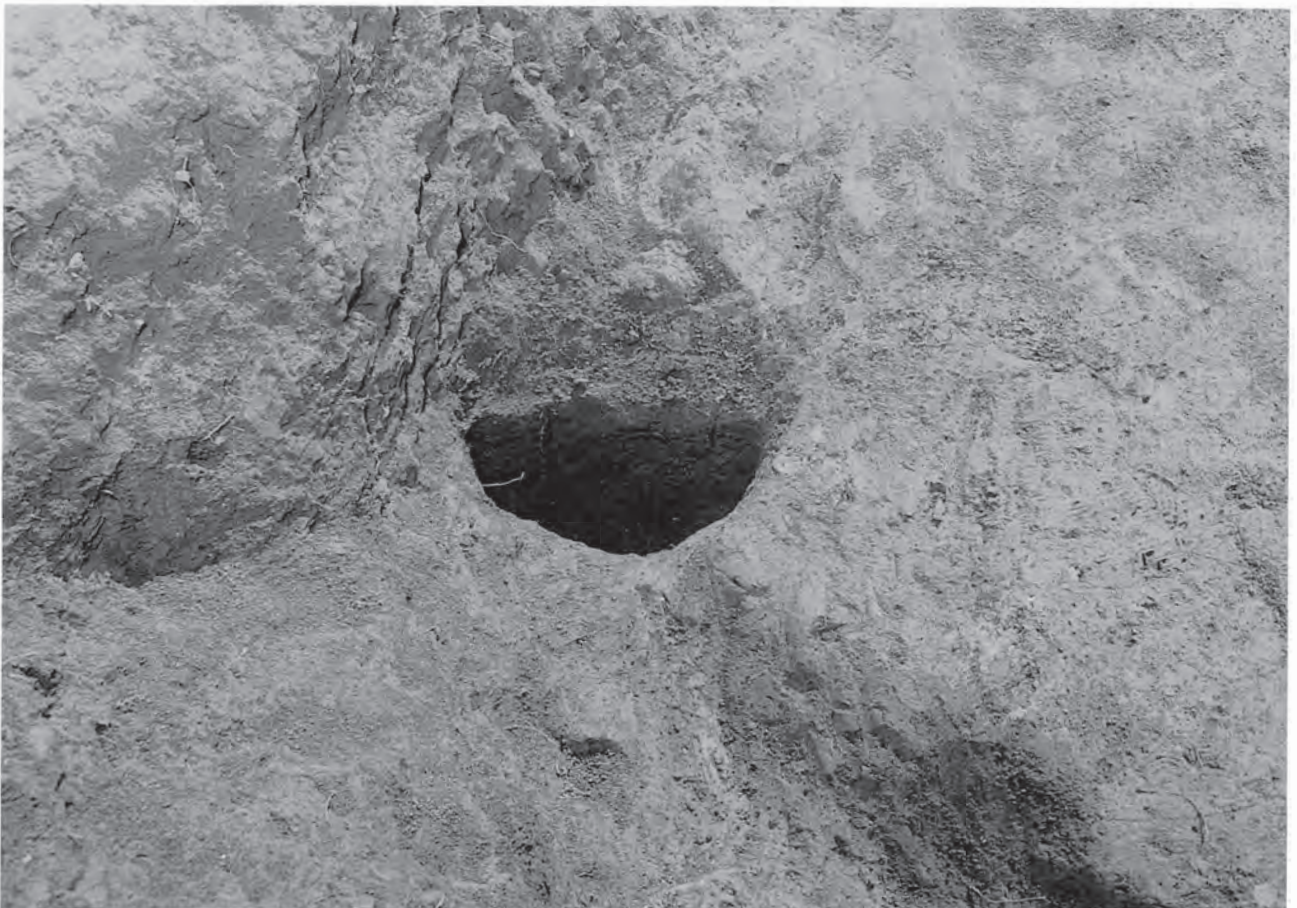


遺物出土状況（天目茶碗）





P 5 (堆積状況)



P 12 (堆積状況)



# 第6図版



第2号掘立柱建物跡（完掘状況）



第2号掘立柱建物跡（堆積状況）





P 3 (堆積状況)



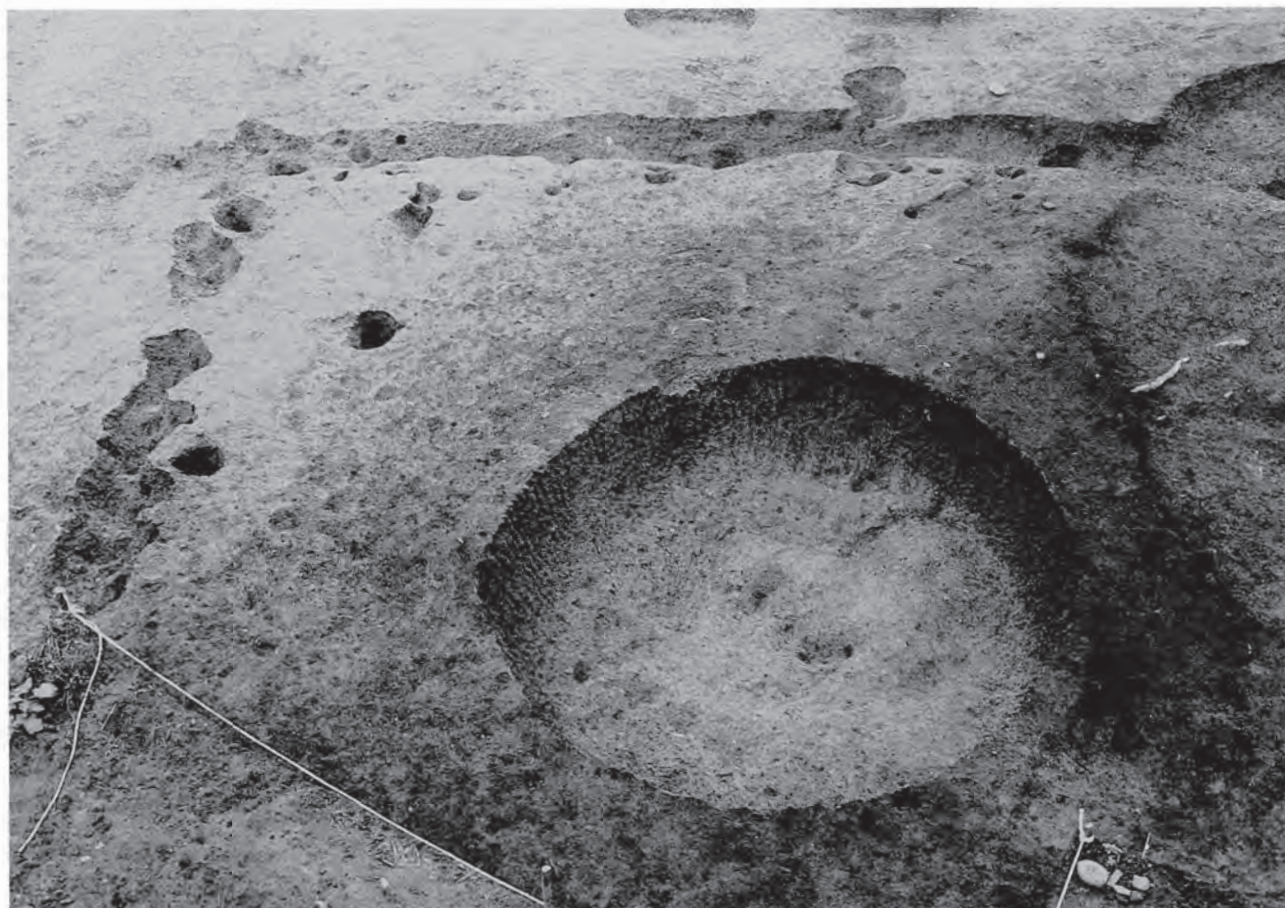
遺物出土状況 (染付茶碗)



# 第8図版



第3号遺構、第14号土坑跡（完掘状況）



第3号遺構、第14号土坑跡（完掘状況）





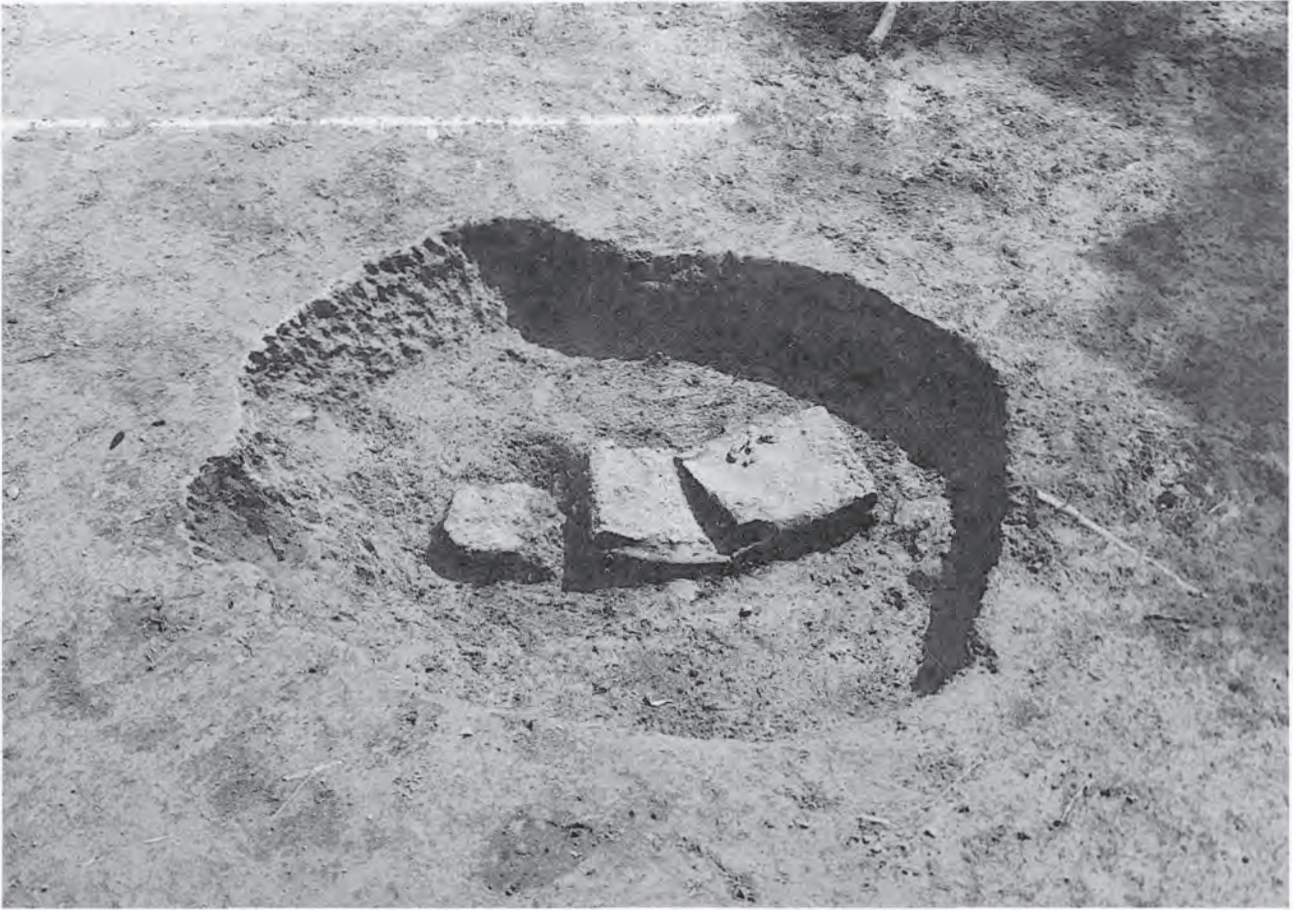
第1号土坑跡（堆積状況）



第3号土坑跡（堆積状況）



# 第10図版



第11号土坛跡（遺物出土状況）



第15号土坛跡（完掘状況）

宮古市埋蔵文化財調査報告書26

# 熊野町遺跡

—昭和63年度発掘調査報告書—

1990.3

発行 岩手県宮古市教育委員会  
宮古市新川町2番1号

印刷 株式会社文化印刷  
岩手県宮古市大通2丁目5の2